The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本統治下台湾における新演劇興行の実態 : 明治三十八年台南座蜻蛉会の芝居番付より
Author(s)	中尾, 薫
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2023, 63, p. 149-197
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91250
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本統治下台湾における新演劇興行の実態

——明治三十八年台南座蜻蛉会の芝居番付より——

中尾　薫

日本が台湾を統治下においたのは、明治二十八年（一八九五）から昭和二〇年（一九四五）の五〇年である。その間、日本からの移植者による様々な文化活動がおこなわれていた。演劇についていえば、日本統治時代にのべ三百近い劇場があったとされ[1]、このうち日本関連の演劇・芸能の興行をおこなう劇場では、俄、浪花節、水芸、落語、浄瑠璃（義太夫節）、旧劇（歌舞伎）、新演劇（壮士芝居、正劇、新派）等、様々な公演が行われていた。とくに、新演劇については、明治四十四年（一九一一）の川上音二郎一座の台湾公演が著名で、のちに台湾人知識層による新劇運動がおこった事情もあって、日台双方の研究者によって研究が進んでいる。

本論文で紹介する台南座蜻蛉会芝居番付（十枚、以下「本番付」と略すことがある[2]）は、台南にあった日本人資本の劇場「台南座」における正劇派「蜻蛉会」なる一座の新演劇の芝居番付である。明治三十八年（一九〇五）という年記が明記されるのは三枚のみだが、ほかの七枚も同年のものと推定され、これは川上音二郎一座の公演より以前ということになる。日本統治下台湾では、明治三十年（一八九七）頃から、台北市街地や基隆を中心に、壮士芝居、書生芝居が上演されていたことはすでに指摘されており、おおよそ素人役者や無名の役者によると考えられている[3]。本番付に登場する俳優も確かにそれほど著名とは言えない俳優ばかりと言えそうだが、同一座における俳優の入れ替わりや、演目（教言）の上演日数の詳細など、当時の興行の具体像を考察することができる。また、本芝居番付の内容は、もっとも情報量の多い資料として活用されている『台湾日日新報』には網羅されていない。それは同新聞が台北の情報が中心であるということとも関わるだろう。川上音二郎一座の公演より以前の「正劇」興行の実態を詳細に知ることができる資料である点、あまり多くの情報を知り得ない台南における公演資料である点からして貴重と言って良い。まずは、資料の概要・翻刻を示したうえで、本資料から読み解

ける興行の実態を考察していきたい。

一、台南座蜻蛉会の芝居番付（翻刻）

まず、芝居番付の各寸法と、特記事項や年代推定理由等を備考として記したうえで、翻刻を示す。掲出順は年の記載・不記載に関わらず、掲載月日を基準とし、1～10の整理番号を付している。以下、個別の番付について述べる時、（　）でその数字をあげることで識別することがある。先述の通り、明治三十八年の年表記があるのは三枚（3，5，7）のみで、他の七枚は、開演の月日のみが記載されている。このうち、口上書の内容から年代が特定できるものは二枚（6，8）で、その根拠を備考に示したが、いずれも明治三十八年と推定される。そのほかの五枚は年を特定する根拠としては薄いが、俳優の出入りについて他資料から補足した情報との整合性や興行の実態に鑑みて、同年と考えて大きな矛盾はないと思われる。つまり、掲出した順番が興行の順と考えて差支えなさそうで、本番組は明治三十八年（一九〇五）の九月～十一月における、台南座の興行資料であると推定している。

記載される内容は、年記のある三枚（3，5，7）以外は同じ寸法で、様式も類似する。ただし十枚とも芝居番付である点は同じであり、中央上部に右横書きにて「臺南座（台南座紋）新演劇」等の劇場名とジャンル名が書かれるのは共通している。その下に同じく右横書で「當月日、開演時間」などと日付が記されるものもあれば、書かれないものもある。おおよその下、番付の中央に配置される四角の飾り枠が大部分をしめ、その中に「口上書」と、場面割毎の役割が記されるものが多いが、口上書が枠外にあるもの、場面毎の役割が詳細でないものもある。また、枠外の左側には座席料金に関する取り決め、枠外下部に印刷会社名が記されるのが大部分だが、それらの記載がないものもある。枠外の左右に裏面の広告についての注記があるものもある。このような状態を踏まえて、翻刻は、掲載場所に応じてa～eに項目分けして示した。それぞれの掲載場所は以下の通りである。

a 中央上部の横書部分。
b 飾り枠外右側。
c 飾り枠内。

d飾り枠外左側。
e飾り枠外下部の横書部分。

なお、その場所に文字が書かれていない場合は項目ごと略した。具体的には、b、eに文字が記載されないため省略したものがある。また、場面割毎の配役一覧は、二段組もしくは三段組で組まれているが、翻刻では紙幅の都合で原本と一致しない。また飾り枠の模様やイラスト等については備考にも記していない。aに紋が掲載されるものがあり、台南座の紋と考えられるが、翻刻では［（台南座紋）］としてる。これらは、表面のみの写真を図版として末尾にあげているので、適宜参照されたい。また、裏面には台南市の商店の広告が載っているものもあるが、本論文では備考に広告の大見出しと、広告主を示すのみとし、翻刻、図版掲載ともに省略する。また、掲載される漢字表記は可能な限り原文の通りの字体とする。印刷が薄くなり判読不明な文字は□にした。口上書は便宜上、句読点を補った。

1、九月二十日開演、正劇派「蜻蛉会」による『美人の生埋』番付

寸法：27.8×39.5㎝（縦×横。以下同。）

備考：年記載はないが、口上書に「扨蜻蛉會當地に於て興行を重ねたる事茲に九十日余」とある。口上書の上部に日章旗と旭章旗の絵あり。裏面広告なし。

翻刻：

a

臺南座［（台南座紋）］新演劇

一日曜祭日は午前十一時より晝興行致舛●雨天に不拘致舛●来る九月二十日開演

c

一雨毎に気候も冷敷相成候處、観客諸彦愈々御清榮奉賀候。扨當蜻蛉會儀御當地に於て興行を重ねたる事、茲に九十日余。毎教言共御引立を蒙り、誠に難有御禮申上候。就ては教言の儀も新陳代謝可成御目新敷物をと存じ居り候へ共、何分役割衣装道具萬端等に於て不揃の廉も有之候為め、思ふに儘かせぬ事も多々有之候。然るに今回総ての事に於て完全仕り候に付、吾々新劇界に於て四ツ谷怪談とも可申

（松の操）美人の生埋と題する教言を演出仕り候。當教言の大要は最も残忍なる戀の意を抽寫したる面白き教言に有之候に付、前教言同様御引立の程を奉希上候敬白。

臺南座主
正劇派蜻蛉會員　敬白

（松の操）美人の生埋（びじんいきうめ）　全十二場

第一　竹ヶ崎粥川圖書別荘の場

粥川圖書　小池三郎
八ッ車長次　縣健之助
藝者小勝　住吉豊美
眞葛周玄　藤島操
粥川お蘭　中村敏太郎
返シ　同家大秘密室の場
粥川圖書　小池三郎
眞葛周玄　藤島操
娘おとき　縣健之助
千島禮蔵　佐々木紫峯
八ッ車長次　縣健之助
黨員大ぜい　明手
お蘭　中村敏太郎
黄返シ　鴨居沖難船の場
浅

石井山三郎　岡本操
船頭喜六　高田義雄
櫻川馬作　小松平春雄
第二　馬堀村浄蓮寺生埋の場
石井山三郎　岡本操
櫻川馬作　小松平春雄
眞葛周玄　藤島操
千島禮蔵　佐々木紫峯
僧海俊　高田義雄
黨員金田市郎　縣健之助
粥川圖書　小池三郎
返シ　仝境内湯灌の場
井桁屋米蔵　伊勢一馬
百姓與市　住吉豊美
百姓作三　高野潤次郎

石井山三郎　岡本操
粥川圖書　小池三郎
返シ　元の浄蓮寺の場
石井山三郎　岡本操
僧海俊　高田義雄
おらん　中村敏太郎
眞葛周玄　藤島操
第三　勝男舘結婚の場
石井山三郎　岡本操
眞葛周玄　藤島操
千島禮蔵　佐々木紫峯
母石井おせつ　高野潤次郎
石井ふじ　縣健之助
僧海俊　高田義雄
黨員金田市郎　後藤晃

仝　和田友春　中村敏太郎
粥川圖書　小池三郎
櫻川馬作　小松平春雄
つなぎ幕　小原山中決闘の場
石井山三郎　岡本操
粥川圖書　小池三郎
第四　鳶頭江戸屋半五郎内の場
江戸屋半五郎　伊勢一馬
弟半次　高野潤次郎
女房小勝　住吉豊美
下女おとみ　佐々木紫峰
魚屋新助　小松平春雄
d
◎木戸大人金貳拾錢◎小人軍人金拾錢◎下足は何人に不限場へ持込事御斷申候壹等桟敷金壹圓貳等八拾錢上割御壹人拾五錢小人拾錢◎注意午後六時迄ニ御出ノ方ニハ木戸半額ニ仕候

石井山三郎　岡本操
返シ　馬堀浄蓮寺悪事發覺の場
住職悪僧海善　岡本操
江戸屋半次　高野潤次郎
女房小勝　住吉豊美
第五　粥川家大秘密室の場
粥川圖書　小池三郎
眞葛周玄　藤島操
千島禮蔵　佐々木紫峰
八ッ車長次　縣健之助
江戸屋半次　高野潤次郎
女房小勝　住吉豊美

返シ　粥川邸火事場自滅の場
石井山三郎　岡本操
粥川圖書　小池三郎
眞葛周玄　藤島操
千島禮蔵　佐々木紫峯
江戸屋半五郎　伊勢一馬
弟半次　高野潤次郎
女房小勝　住吉豊美
お蘭　中村敏太郎
消防大ぜい　明手

2、九月二十四日開演、正劇派「蜻蛉会」による『大名と旗本』番付

寸法：27.8×39.0㎝
備考：口上書の上部に日章旗と旭章旗の絵あり。裏面広告、色刷で「呉服冬物大賣出し」「壹南做蔑街　本庄呉服支店（電話一四〇番）」。
翻刻：

a

臺南座［(台南座紋)］新演劇

一日曜祭日は午前十一時より晝興行致舛●雨天に不拘致舛●来る九月廿四日開演一

b

今回の替り藝題は一**大名と旗本**一と申し先年**岩崎舜花先生**が**高田實**の為めに書卸したるものにして**大阪朝日座**に於て興行なし、大喝采を博したる好狂言にして其の大要は大名と旗本の内容を寫し其の間互に家庭に破瀾を生じつゝあるを一人の俠骨男兒顕われ此の波瀾を修むると云ふ趣味タツプリの狂言にして猶是れに改良脚色を加へ御高覧に相供し可申候間、何卒御来觀の榮を垂れ給わん事を伏して奉希上候

頓首

臺南座主

正劇派蜻蛉會員　敬白

c

『大名と旗本』全九場

第一　園部靱負宅の場

園部靱負　伊勢一馬

娘静江　縣健之助

母よし子　小松平春雄

婆おくら　中村敏太郎

返シ　口入屋おくら内の場

婆おくら　中村敏太郎

園部静江　縣健之助

母よし子　小松平春雄

娘おと□　住吉豊美

飾売　後藤晃

仕出し　高田義雄

仝　藤島操

藝者松次　高野潤次郎

返シ　太郎稲荷おくら殺しの場

星川新三　佐々木紫峰

婆おくら　中村敏太郎

うどんや喜一　後藤晃

書生友成　藤島操

仝　本島　高田義雄

園部靱負　伊勢一馬

家令安藤保之　岡本操

第二　情夫密會花月樓座敷の場

子爵花園義弘　中村敏太郎

藝者松次　高野潤次郎

仲居おしげ　藤島操

星川新三　佐々木紫峰

安藤保之　岡本操
返シ　大廣間演説の場
海軍少尉　橋本健一郎　小池三郎
家扶渡邊進　伊勢一馬
新聞記者木村欣一　佐々木紫峰
子爵　花園義廣　中村敏太郎
親戚大ぜい　明手
藝者大金　住吉豊美
仝　留八　小松平春雄
仝　米吉　藤島操
仝小菊實は娘静江　縣健之助
安藤保之　岡本操
返シ　花月樓座敷の場
d
◎木戸大人金貳拾錢◎小人軍人金拾錢◎下足は何人に不限場へ持込事御斷り申候壹等棧敷金壹圓貳等八拾錢上割御壹人拾五錢小人拾錢◎
注意午後六時迄ニ御出ノ御方ニハ木戸半額ニ仕候

藝者大金　住吉豊美
仝　留八　小松平春雄
仝　米吉　藤島操
仝小菊　縣健之助
木村欣一　佐々木紫峯
橋本健一郎　小池三郎
第三　北海道占守島の場
安藤保之　岡本操
父保之進　高野潤次郎
木村欣一　佐々木紫峯
花園雪子　住吉豊美
水兵二名　明手
アイヌ土人　明手

橋本健一郎　小池三郎
第四　根岸藝妓松次宅の場
藝妓松次　高野潤次郎
婆おくめ　縣健之助
星川新三　佐々木紫峯
安藤保之　岡本操
第五　上野觀月の場
安藤保之　岡本操
藝妓松次　高野潤次郎
星川新三　佐々木紫峰
大　團　圓

此うらの廣告を御覧なさい

3、明治三十八年九月三十日付、正劇派「蜻蛉会」による『琵琶歌』番付
寸法：39.5×54.4cm

備考：明治三十八年（一九〇五）九月三十日付。裏面広告なし。「述詞」から、本公演より河本重徳が一座に加入したこと、そのほかの役者が、岡本操等一派であったことが知られる。河本重徳の口上書があり、台北の栄座で興行していた役者であること、『琵琶歌』の興行に関する説明から当日の一演目あたりの興行日数などが知られる（後述）。なお、九月三十日より前の月日の1，2に河本重徳の名が見えないので、その点では、1，2，3の順で矛盾がない。

翻刻：

a

臺南座［(台南座紋)］新演劇

c

述詞

當座永々と興行罷在候處毎教言共御高評を博し候段座主始め會員一同奉鳴謝候。就ては其の御厚恩に報ゆる為め今回**河本重徳**を差加へ茲に岡本操等一派と共に返り初日の決心にて益々奮勵仕り愈々正劇の眞善眞美を發揮するの微意に有之候間不間不相變御見捨なく御引立の程奉祈候

明治卅八年九月三十日　　臺南座主

正劇派蜻蛉会會員　　敬白

私儀是迄臺北榮座に於て興行罷在、當座主の招きにより再三再四来南なさんと致し候へ共種々都合有之候為め、今日迄延引仕り候段誠に恐縮の至りに御座候。然して今回演出致し候**琵琶歌**の儀は昨年十二月中**大阪朝日新聞**が**壹千圓**の懸賞を以て小説を募集したる際日露戦争の為め出征旅順攻圍軍中の或る軍人が著作に係り遂に壹千圓の賞金を受けたるものにして東京大坂京都の各座は申すに及ばず都鄙至る處の劇場にて興行毎に大喝采を博し現に臺北**榮座**に於て興行の折は連日大入の為め三日目毎の教言なるにも不拘五日間興行致し候一事を以ても如何に其の趣味の豊富なるやを知るに足るべく候。茲に自分は拙藝を不顧御目見榮として本教言を出演仕り候に付き何卒前来俳優同様御引立の程希上候

河本重徳敬白

琵琶歌（びわうた）　全七冊

場割

第一段
第一　手向之花（相州翠ヶ谷荒井三蔵宅）

第二段
第一　親の慈悲心（武田貞次宅）
第二　是非共嫁に（荒井三蔵宅）

第三段
第一　樂中之苦（武田内）
第二　母の猜忘（同一室）

第四段
第一　飽かぬ別れ（由井ヶ濱）

第五段
第一　とき色の手巾（神武寺坂）

第六段
第一　鶴の一聲（花浦邸前）
第二　高貴と下賤（同室内）

第七段
第一　病床へ吉報（荒井三藏宅）
第二　名譽の出征（ステーション）

配役

武田貞次　河本重徳
仝母たつ　中村敏太郎
荒井里野　住吉豊美
武田正次　伊勢一馬
西村澄子　侍女お梅　縣健之助
男爵江島春磨　小池三郎
菊石之熊吉　醫學士原誠一　高田義雄
熊吉女房お鎌　漢方醫武村繁　藤島操
家扶六兵衛　村長息子榮市　小松平春雄
西村禮太　佐々木紫峰
花浦菊江　高野潤次郎
荒井三造　岡本操

d

◉正午後六時開演

e

〔臺南田中活版所印行〕

4、十月十五日開演、正劇派「蜻蛉会」による『福徳利』、『とんぼと鷲』番付

寸法：27.5×39.2㎝

備考：裏面広告なし。

翻刻：

a

臺南座〔(台南座紋)〕新演劇

〔當る十月十五日正午五時卅分開演〕

c

一番目青年立志福徳利は有名なる文士大須賀豐先生の大作にして京坂地方に於て大好評を博したる者にして正劇としては尤も其當を得たる好教言にして興味豊富たる好藝題に候

二番目　とんぼと鷲は日露戦争未来の夢とも可申藝題にして、已に日露間に於て平和の局を結びたるも如何に、其の戦争開始前には露國人が我が帝國の防備を探ぐらんが為めに苦心したるか、又其の軍事探偵を發くに我が當局者が如何に神心の勞苦を重ねたるかを脚色したるものにして、是れ又正劇の美を盡したるものに有之候間。何卒倍舊のご愛顧あらんことを奉祈候。

臺南座主

正劇派蜻蛉会員　敬白

一番目　福徳利（ふくとくり）　全三幕
二番目　とんぼと鷲（わし）　全三幕

一番目

第一　奥羽安達村茶店の場
銀行員田毎新　伊勢一馬
洋服商信濃屋　小松平春雄
緒方保武　岡本操
車夫房吉　藤島操
仝　鐵三　高田義雄
仲居お花　高野潤次郎
茶屋婆おくみ　縣健之助
村長永瀬廣右エ門　小池三郎
醫學生藤井寛　中村敏太郎
返シ　上住村立場茶屋の場
緒方保武　岡本操
車夫根津寅　佐々木紫峰
仲居お花　高野潤次郎
醫學生藤井寛　中村敏太郎
茶屋娘いと　住吉豊美
返シ　三本松の場
仲居お花　高野潤次郎
緒方保武　岡本操
根津寅　佐々木紫峯
第二　鳥森床辰理髪店の場
返シ　藝妓小花宅の場
藝者小花　高野潤次郎
田毎新　伊勢一馬
信濃屋　小松平春雄
房吉　藤島操
若旦那芳三郎　河本重徳
箱屋仙太　住吉豊美
下女かね　縣健之助
仕出し　高田義雄
緒方保雄　小池三郎
主人床辰　中村敏太郎
阿保駄羅の松　高田義雄
根津寅　佐々木紫峰
下ぞり兼吉　岡本操
第三　百尺樓座敷の場
田毎新　伊勢一馬
緒方保雄　小池三郎
藝者小花　高野潤次郎
信濃屋　小松平春雄
房吉　藤島操
根津寅　佐々木紫峰
仲居おきみ　縣健之助
醫學生藤井寛　中村敏太郎

二番目

第一　浄光寺門前の場
返シ　居留地海岸の場
半休坊　小池三郎
日曜坊　高野潤次郎
どんたく坊　佐々木紫峰
露國人プールアオン　河本重徳
通譯橋本要蔵　伊勢一馬
コックの元吉　藤島操
憲兵曹長花岡貞策　岡本操
銘酒屋女おとみ　住吉豊美
第二　プールアオン商館門前の場

返シ　仝館室内の場　　母まさ　中村敏太郎　　通譯橋本要蔵　伊勢一馬
プールアオン　河本重徳　　酒飯乞食實は花岡貞策　岡本操　　コックの元吉　藤島操
通譯橋本要蔵　伊勢一馬　　**第三**　元門前の場　　花岡貞策　岡本操
コックの元吉　藤島操　　おとみ　住吉豊美
おとみ　住吉豊美　　プールアオン　河本重徳
d
◎木戸大人金貳拾錢　◎小人軍人金拾錢
◎壹等棧敷金壹圓　貳等八拾錢　上割御壹人拾五錢　小人拾錢
◎下足は何人に限らず場へ持込こと御斷申候
◎注意　午後六時までに御出の方には木戸半額に致升
e
（臺南田中活版所印行）

5、明治三十八年十月二十一日開演、正劇派「蜻蛉会」による『己が罪』番付

寸法：39.5×55.2cm

備考：本番付と7のみ新演劇ではなく「新派」を掲げる。他の番付と大きさがことなり、B3版と大きい。裏面広告は用紙を縦に使い、上下二段に掲載される。上段が、「第二回呉服冬物大賣出し」／「臺南こべつ街　本庄　呉服支店」。下段が「勉強廣告」／「臺南座となり美登利家」。

翻刻：

a

新派演劇

b

口　演

好劇家諸君の御望みにより兼而出演致し度と存居り候有名なる劇**菊池幽芳先生**の著作に係る「巳が罪」前中後の三編を茲に出演するの光榮に相接し申し候

當教言は當會が御目見榮として出演可致所存に有之候處何分共萬事不整頓の為め今日迄延引仕り候。然るに配役道具等に於ても総て相揃ひ申し候に付き愈々今廿一日より之れを前後二回に分ち正午後五時を以て無相違開幕可仕候に付何卒御来場の程偏に奉願上候

臺南座主
當ル明治三十八年十月廿一日正午後五時開演　正劇派　蜻蛉會員　敬白

c

菊池幽芳作　巳が罪（をのつみ）　前後兩編

第一回（前）

第一　上野ステーション
西洋人モリソン　佐々木紫峰
箕輪環　中村敏太郎
園田島子　住吉豊美
塚田母　高野潤次郎
女學生松島　縣健之助
車夫熊三　小松平春雄
探偵大村　河本重徳
仕出し　明手
塚田虔三　小池三郎

返シ　大木小枝子宅
塚田虔三　小池三郎
大木小枝子　藤島操
車夫大ぜい　明手
探偵大村　河本重徳
車夫熊三　小松平春雄
箕輪環　中村敏太郎

第二　クリスト教會堂
モリソン　佐々木紫峰
大木小枝子　藤島操
信者　明手

傳道師　高田義雄
箕輪環　中村敏太郎
塚田虔三　小池三郎

第三　下宿屋眞砂舘
園田島子　住吉豊美
塚田虔三　小池三郎
塚田母　高野潤次郎
書生今井　高田義雄
下女おしん　藤島操
たまき　中村敏太郎

返シ　千駄木環宅

園田島子　住吉豊美
婆お巻　小松平春雄
たまき　中村敏太郎
塚田虔三　小池三郎
第四　向島
たまき　中村敏太郎
おうた　佐々木紫峰
うどんや實ハ探偵井伊　高田義雄
探偵大村　河本重徳
お巻　小松平春雄
箕輪傳三　岡本操
第五　向島お歌内環病室
和田作平　高野潤次郎
おみの　縣健之助
大木小枝子　藤島操
醫士平岡活　河本重徳
たまき　中村敏太郎
おうた　佐々木紫峰
箕輪傳三　岡本操
返シ　おうた座敷
おうた　佐々木紫峯
大木小枝子　藤島操
箕輪傳三　岡本操
醫士平岡活　河本重徳
和田作平　高野潤次郎
返シ　元の病室
和田作平　高野潤次郎
大木小枝子　藤島操
箕輪傳三　岡本操
おみの　縣健之助
おうた　佐々木紫峰
第六　塚口内
島子　住吉豊美
車夫熊三　小松平春雄
塚田虔三　小池三郎
書生木村　高田義雄
下女おさい　藤島操
モリソン　佐々木紫峯
返シ　向島島子殺し
モリソン　佐々木紫峯
車夫熊三　小松川（ママ）春雄（ママ）
島子　住吉豊美
二十四日より替り
第二回（後）
第七　箱根福住樓
櫻戸子爵　岡本操
櫻戸正弘　子役
たまき　中村敏太郎
醫士松本柳太郎　佐々木紫峰
下女お菊　住吉豊美
醫學博士塚田虔三　小池三郎
返シ　離座敷
塚田虔三　小池三郎
たまき　中村敏太郎
第八　防州海岸
和田作平　高野潤次郎
下女お菊　住吉豊美
おみの　縣健之助
子供大ぜい　明子
たまき　中村敏太郎
櫻戸正弘　子役
和田玉太郎　子役
櫻戸子爵　岡本操

浅黄返シ　甲岩
和田玉太郎　子役
櫻戸正弘　子役
浅黄返シ　海岸
玉太郎　子役
正弘　子役
村人大ぜい　明手
おみの　縣健之助
和田浪七　河本重徳
和田作平　高野潤次郎
第九　作平内
櫻戸子爵　岡本操
和田作平　高野潤次郎
浪七　河本重徳
おみの　縣健之助
村長　高田義雄
巡査　小池三郎
醫者　河本重徳
村者　明手
d
◎木戸大人金貳拾錢　◎小人軍人金拾錢

車夫　藤島操
たまき　中村敏太郎
第十　天下茶屋傳三宅塀外
郵便夫　高田義雄
作平　高野潤次郎
下女おはる　小松平春雄
返シ　座敷
箕輪傳三　岡本操
下女おはる　小松平春雄
和田作平　高野潤次郎
返シ　元の塀外
櫻戸子爵　岡本操
車夫　藤島操
たまき　中村敏太郎
返シ　座敷
箕輪傳三　岡本操
櫻戸子爵　岡本操
たまき　中村敏太郎
第十一　サイコン島

たまき　中村敏太郎
モリソン　佐々木紫峰
印度人　明手
塚田虔三　小池三郎
第十二　サイコン赤十字病院
臺北病院看護婦長櫻戸環　中村敏太郎
博士塚田虔三　小池三郎
院長春田　高田義雄
看護婦　住吉豊美
看護士　縣健之助
櫻戸子爵　岡本操
返シ　長崎沖東洋丸船中
櫻戸子爵　岡本操
たまき　中村敏太郎
ボーイ　高田義雄
家令石田　河本重徳
紳士　惣出
塚田虔三　小池三郎

◎壹等棧敷金壹圓　貳等八拾錢　上割御壹人拾五錢　小人拾錢
◎下足は何人に限らず場へ持込こと御斷申候
◎注意　午後六時までに御出の方には木戸半額に致升
臺南座
d
（臺南田中活版所印行）

6、十月二十七日開演、正劇派「蜻蛉会」による『怨之杖』番付

寸法：27.6×39.6㎝
備考：口上書に「愈々明日は本島唯一の臺灣神社の御祭典加ふるに招魂祭を兼ねる戦後初めて大祭典」とある。明治三十八年十月十三日付『台湾日日新報』記事に「来る二十八日、九日両日に於て挙行せられるべき臺南御遺跡所及招魂祭典に付き」とあるのと合致するので、やはり明治三十八年と考えてよいだろう。戦後とは日露戦争後。裏面広告は色刷。「呉服冬物大賣出し」／「臺南保西宮街　古物商安藤方／岐阜市美園町㊥木綿屋出張所」。
翻刻：
a
臺南座［（台南座紋）］新演劇
當る十月廿七日正午後五時卅分開演
c
愈々明日は本島唯一の臺灣神社の御祭典。加ふるに招魂祭を兼ねる戦後初めて**大祭典**に御座候。就ては當會に於ても此の際諸君の御満足を買ふに價ひする教言を出演致し度と存し、協議の末［明治の駒下駄］**怨之杖**と申す藝題と決定仕り候。當教言は舊劇に於ける**肥後之駒下駄**に類似せしものにて、一人の書生幾多の艱難辛苦の末遂に高潔なる立脚の地位を得ると云ふ筋を遺憾なく表情したる最も斬新なる好教言にし

て、未だ曾て臺灣に於て出演せし事なく、御當地を以て嚆矢とする箱入物に御座候間、何卒前教言に倍し御評判御来觀の程奉願候。

臺南座主
正劇派蜻蛉会員　敬白

〔明治の駒下駄〕怨之杖（うらみのすてつき）　全六幕

第一　鹽田文之進宅
鹽田文之進　高野潤次郎
伜　文太郎　縣健之助
娘　鈴子　住吉豊美
下女　みち　藤島操
関　幸哉　河本重徳
蔦藤新之助　中村敏太郎
返し　千葉團平宅
伊藤仙三郎　佐々木紫峰
蔦藤新之助　中村敏太郎
書生石川　小松平春雄
仝　山村　高田義雄
仝　西田　藤島操
関　幸哉　河本重徳
千葉團平　岡本操
返し　鹽田宅
鹽田文之進　高野潤次郎
下女　みち　藤島操
関　幸哉　河本重徳
千葉團平　岡本操
第二　臺灣舊港の原野
蔦藤新之助　中村敏太郎
藤村曹長　高田義雄
齋藤軍曹　藤島操
人夫長太　高野潤次郎
仝　熊三　佐々木紫峰
土匪大ぜい　明手
陸軍大尉加藤正明　小池三郎
返し　幕營
新聞記者　大村誠　河本重徳
蔦藤新之助　中村敏太郎
藤村曹長　高田義雄
齋藤軍曹　藤島操
加藤大尉　小池三郎
第三　東京洲崎東雲樓宴會
新聞記者上野良三實ハ千葉團平　岡本操
新聞記者　大村誠　河本重徳
仝　内藤榮　小松平春雄
仝　川上静夫　藤島操
仲居おしん　縣健之助
楼主　高野潤次郎
娼妓鈴江實ハ鹽田鈴子　住吉豊美
蔦藤新之助　中村敏太郎
返し　成田道
伊藤仙三郎　佐々木紫峰
蔦藤新之助　中村敏太郎
車夫金五郎　高田義雄
千葉團平　岡本操

第四　野毛山雪中　　蔦藤新之助　中村敏太郎　　乳母さと　住吉豊美
蔦藤新之助　中村敏太郎　　**第五**　千葉團平宅　　書生横道　高田義雄
車夫三九郎　小松平春雄　　車夫三九郎　小松平春雄　　親戚大ぜい　明手
関　幸哉　河本重徳　　蔦藤新之助　中村敏太郎　　新聞記者大村誠　河本重徳
千葉團平　岡本操　　千葉團平　岡本操　　伊藤仙三郎　佐々木紫峯
返し　野毛山下交番所　　**第六**　柳原邸玄関　　伊藤妻芳江　高野潤次郎
巡査香月　高田義雄　　**返し**　伊藤仙三郎宅　　大尉加藤正明　小池三郎
仝木村　佐々木紫峯　　**返し**　柳原結婚場　　子爵柳原老公　岡本操
見物大ぜい　明手　　蔦藤新之助　中村敏太郎
車夫三九郎　小松平春雄　　令嬢花子　縣健之助

d

◎木戸大人金貳拾錢　◎小人軍人金拾錢
◎壹等棧敷金壹圓　貳等八拾錢　上割御壹人拾五錢　小人拾錢
◎下足は何人に限らず場へ持込を御斷申候
◎意注（ママ）午後六時までに御出の方には木戸半額に致升

e

（臺南田中活版所印行）

7、明治三十八年十一月二日開演、正劇派「蜻蛉会」による『武士道』番付

寸法：26.5×55.2cm

備考：本番付と5のみ「新演劇」ではなく「新派」を掲げる。口上書の「扨先月来劇家諸君より今次の天長節には兼て御目見榮の際に演

出したる「武士道」を再演せよとの御勧め有之」から「武士道は、再演で、台南座での蜻蛉会の最初の演目だったと推察される。

翻刻：

a

新派演劇

口演

今日は十一月三日の朝よ。旭に輝く日の丸の國旗は門並ヒイラ〳〵と可愛らしき御聲をして御坊ちゃんや御嬢さんが御歌ひなさる。恐れ多くも

今上皇帝陛下の御降誕被遊し、御祝日遥かに東天を拝し、謹んで御鳳壽の長久を奉祈。

扨先月来好劇家諸君より、今次の天長節には兼て御目見榮の際に演出したる「**武士道**」を再演せよとの御勧め有之。就ては其の當時よりは俳優の顔振に於ても非常の異動を生し居り、役割等も今回は全然其配役を最も適當に仕り、前回よりは優るとも劣らざるの決心を以て、茲に再演するの光榮に相接し申候間、何卒御来觀の上、前回と御引競の程奉希上候。頓首。

明治三十八年十一月二日開演　　**臺南座主**

正劇派　蜻蛉會員　　**敬白**

武士道（ぶしどう）　八

第一　精神一到何事カ成ラサラン　　全荒川晋　小池三郎　　深谷與一郎　高野潤次郎

陸軍歩兵曹長櫻田勇吉　河本重徳　　陸軍歩兵大佐椛島輝忠　岡本操　　櫻田勇吉　河本重徳

兵卒　高田義雄

令嬢民子　縣健之助

陸軍歩兵少尉太田原進　藤島操

第二　阿諛ハ自己ノ為メ　　占部初子　住吉豊美　　女中お竹　小松平春雄

第三　服従ハ國家ノ為メ小樽海岸　　畑島権七　佐々木紫峯　　櫻田勇吉　河本重徳

大工吉公　藤島操
令嬢初子　住吉豊美
書生伊藤　小池三郎

第四　此ノ親心

椛島輝忠　岡本操
夫人福島道子　中村敏太郎
令嬢民子　縣健之助
魚屋吉兵衛　高田義雄
八百屋源助　住吉豊美
櫻田勇吉　河本重徳
畑島権七　佐々木紫峯

第五　恩義ノ發砲

夫人福浦道子　中村敏太郎
令嬢民子　縣健之助
占部初子　住吉豊美
人夫伍長作右衛門　小松平春雄
人夫大せい　明子
石田曹長　高田義雄

臺南座

e

（臺南田中活版所印行）

少尉太田原進　藤島操
櫻田勇吉　河本重徳
少尉荒川晋　小池三郎
深谷與一郎　高野潤次郎

第六　武士ノ血涙

櫻田勇吉　河本重徳
當番兵　住吉豊美
番兵　高田義雄
人夫伍長作右衛門　小松平春雄
人夫大せい　明子
少尉太田原進　藤島操
令嬢民子　縣健之助
福浦道子　中村敏太郎
大佐樺島輝忠　岡本操

第七　軍用輕氣球成功

畑島権七　佐々木紫峯
櫻田勇吉　河本重徳
百姓李佑　中村敏太郎

仝お米　縣健之助
子分要次　藤島操
仝　金太　高田義雄
作右衛門　小松平春雄
狂婆おかん　高野潤次郎
少尉荒川晋　小池三郎

第八　耐忍ノ譽

櫻田勇吉　河本重徳
寶田勇三　中村敏太郎
作右衛門　小松平春雄
福浦民子　縣健之助
（ママ）觀迎者大せい　明手
占部初子　住吉豊美
深谷與一郎　高野潤次郎
樺島輝忠　岡本操

大　團　圓

8、十一月五日開演、正劇派「蜻蛉会」による『人身の詐偽』番付

寸法：27.7×39.5cm

備考：「本日は我友邦たる英國と攻守同盟を結びし祝賀會」という口上の文言がある。明治三十八年（一九〇五）十一月十日付『台湾日日新報』から、十一月五日に臺南で日英同盟祝賀會が行われていることが確認できる。本公演も明治三十八年と考えて差し支えないだろう。口上書の上部に日章旗と旭章旗の絵あり。裏面広告なし。

翻刻：

a

臺南座〔(台南座紋)〕新演劇

〔當る十一月五日正午後五時卅分開演〕

謹呈。本日は我友邦たる**英國**と**攻守同盟**を結びし祝賀會にして此の同盟に依つて東洋の平和否世界の平和を永遠に確保するに足る誠に祝すべき悦ぶべき事に御座候。

扨替り教言は**人身の詐偽**と題するものにして其の興味の豊富たる此に贅言を要せす。秋の夜長の御退屈防せぎには尤も敵したる好藝題に御座候間、陸續御来車の榮を垂れ給はん事奉願候。

臺南座主
正劇派　蜻蛉會員　敬白

人身の詐偽　全七幕

第一　海墟附近野戦病院　　曹長　谷口源吉　佐々木紫峯　　前田上等平　高田義雄

軍醫　本田貫平　藤島操　　人夫長　横山一角　河本重徳　　看護婦辰子　中村敏太郎

大尉日下部　忠　小池三郎
浅黄**返し**　金洲附近
横山一角　河本重徳
前田上等平　高田義雄
支那人　大ぜい　明手
谷口曹長　佐々木紫峯
第二　日下部座敷
たつ子　中村敏太郎
横山一角　河本重徳
本田貫平　藤島操
黒坊主三太　岡本操
返し　谷口作兵衛宅
大工吉五郎　高野潤次郎
女房お花　住吉豊美
谷口作兵衛　小松平春雄
長屋女　佐々木紫峯
巡査吉田　高田義雄
警部上村　小池三郎
黒坊主三太　岡本操
第三　大工吉五郎仕事場
谷口源吉　佐々木紫峯
吉五郎　高野潤次郎
女房お花　住吉豊美
お菊　縣健之助
大工金　高田義雄
仝助　小松平春雄
黒坊主三太　岡本操
返し　西洋館
洋人ジョンヂー　小池三郎
お菊　縣健之助
支那人　小松平春雄
吉五郎　高野潤次郎
お花　住吉豊美
第四　神崎川の場
お花　住吉豊美
刑事澤村　高田義雄
黒坊主三太　岡本操
第五　日下部家座敷
横山一角　河本重徳
本田貫平　藤島操
書生村井　小松平春雄
親戚大ぜい　明手
令嬢芳子　縣健之助
谷口源吉　佐々木紫峯
たつ子　中村敏太郎
つなぎ幕　茶屋雪陰の場
黒坊主三太　岡本操
谷口源吉　佐々木紫峯
澤村刑事　高田義雄
酔漢　河本重徳
仝　小松平春雄
茶亭　高野潤次郎
吉五郎　高野潤次郎
第六　病院
谷口源吉　佐々木紫峯
吉五郎　高野潤次郎
女房お花　住吉豊美
よし子　縣健之助
澤村刑事　高田義雄
看護婦　藤島操
院長國弘誠　小池三郎
第七　日下部座敷
警部上村　小池三郎

巡査島浦　小松平春雄　横山一角　河本重徳　探偵大ぜい　明手
辰子　中村敏太郎　黒坊主三太　岡本操　本田貫平　藤島操
谷口源吉　佐々木紫峰　**引割**　捕縛　辰子　中村敏太郎
澤村刑事　高田義雄　黒坊主三太　岡本操　谷口源吉　佐々木紫峰
探偵大ぜい　明手　横山一角　河本重徳　警部上村　小池三郎
よし子　縣健之助　澤村刑事　高田義雄
本田貫平　藤島操　巡査島浦　小松平春雄

d

◎木戸大人金貳拾錢　◎小人軍人金拾錢
◎壹等棧敷金壹圓　貳等八拾錢　上割御壹人拾五錢　小人拾錢
◎下足は何人に限らず場へ持込を御斷申候
◎注意午後六時でまに（ママ）御出の方には木戸半額に致升

e

（臺南田中活版所印行）

9、十一月八日開演、正劇派「蜻蛉会」による『天に口なし』芝居番付

寸法：27.4×39.5cm

備考：口上書の上部に日章旗と旭章旗の絵あり。裏面広告は色刷にて「祝開店三週年大賣出廣告」「台南上横街角㊅呉服店」。

翻刻：

a

臺南座［（台南座紋）］新演劇

〔當る十一月八日正午後五時卅分開演〕

b

◎このうらの廣告を御覧なされ五百圓の大景品があります

c

次回替り教言は

関西の文豪並木萍水先生の著作に係る有名なる劇**天に口なし**全六幕を演出致す事と相成候。當藝題は今更申上る迄もなく、最も斬新なる教言にして、前年大坂朝日座、神戸大黒座等にて出演の際は非常の歡迎を受け大喝采の下に三十有餘日間も打續けたるの一時にても已に其の興味の豊富たるを識るに足るものに御座候間、前教言に倍しご来車の上、御高覧の程を。

臺南座主
正劇派　蜻蛉會員　敬白

天に口なし　全六場

第一　冷泉家園遊會

子爵冷泉公泰　河本重徳
牟田口傳吉　小松平春雄
冷泉家夫人綾子　住吉豊美
男爵原田勉　佐々木紫峯
海軍少佐男爵佐藤義矩　小池三郎

返し　同家奥庭

男爵原田勉　佐々木紫峯
冷泉公泰　河本重徳
夫人綾子　住吉豊美
牟田口傳吉　小松平春雄
娘とも江　縣健之助
佐藤義矩　小池三郎

第二　岡崎卓哉玄關

書生花房薫　中村敏太郎
原田勉　佐々木紫峯
岡崎娘とも江　縣健之助
妹きみ　子役
執達吏林友則　高田義雄
酒屋十兵衛　小松平春雄
金貸金左衛門　藤島操
岡崎卓哉　岡本操

返し　仝宅座敷

岡崎卓之丞　小池三郎
娘とも江　縣健之助
原田勉　佐々木紫峯
夫人綾子　住吉豊美

岡崎卓哉　岡本操
第三　冷泉家古池
冷泉公隆　高野潤次郎
書生石本　河本重徳
同　原田　高田義雄
岡崎卓哉　岡本操
男爵佐藤少佐　小池三郎
第四　房州海岸
原田勉　佐々木紫峰
馬丁安三　河本重徳
夫人綾子　住吉豊美
令嬢照子　藤島操
冷泉公隆　高野潤次郎
返し　高砂館座敷
夫人綾子　住吉豊美
冷泉公隆　高野潤次郎
原田勉　佐々木紫峰
牟田口傳吉　小松平春雄
書生大せい　明手
馬丁安三　河本重徳

浅黄**返し**　鋸山
馬丁安三　河本重徳
書生上田　高田義雄
仝　本島　藤島操
冷泉公隆　高野潤次郎
原田勉　佐々木紫峰
第五　日比谷公園
書生花房薫　中村敏太郎
きみ　子役
附馬榮太　高田義雄
茶亭權兵衛　藤島操
學生大ぜい　明手
岡崎卓哉　岡本操
返し　岡崎卓哉宅
岡崎卓哉　岡本操
妻愛子　住吉豊美
娘とも江　縣健之助
妹きみ　子役
醫者豊野　小池三郎
書生花扇薫　中村敏大郎

返し　料亭田毎奥座敷
男爵原田勉　佐々木紫峰
娘とも江　縣健之助
壮士大せい　明手
岡崎卓哉　岡本操
返し　岡崎卓哉卓
冷泉公隆　高野潤次郎
馬丁安三　河本重徳
娘とも江　縣健之助
妹きみ　子役
岡崎卓哉　岡本操
第六　冷泉家大廣間
岡崎卓哉　岡本操
男爵原田勉　佐々木紫峰
馬丁安三　河本重徳
親戚大せい　明手
夫人綾子　住吉豊美
冷泉公隆　高野潤次郎
陸軍中将黒野義門　小池三郎

d

◎木戸大人金貳拾錢　◎小人軍人金拾錢

◎壹等棧敷金壹圓　貳等八拾錢　上割御壹人拾五錢　小人拾錢

◎下足は何人に限らず場へ持込を御斷申候

◎注意午後六時までに御出の方には木戸半額に致升

e

（臺南田中活版所印行）

10、十一月十七日開演、正劇派「蜻蛉会」による『恨一刀』『やり』番付

寸法：27.3×39.0cm

備考：右上が四角く破られている。裏面広告なし。

翻刻：

a

臺南座［（台南座紋）］**新演劇**

［當る十一月十七日正午後五時卅分開演］

c

一番目の恨一刀は戀ならさる戀に初まり、**痴情**の結果其身命を犠牲に供するに終る其情實の爲め逆境に遭遇する一賤民が戀に脳み戀に苦むの邊、觀者をして思はず**同情**を寄せしむるに足る所謂一種の悲劇にして一見惨と呼ばしむるに足る。

二番目のやりは佛國の文豪シエリダン氏の原作にして之れを**翻案**せしは**東都の文豪浪六居士氏**にしてシエリダン氏大作に加ふるに**浪六氏の達腕**を以て**翻案**せしものなれば其内容の如き元より蝶々を要せず當劇場に於てもシエリダン氏の大作の如き未だ嘗て顕れざりしもの今回**當會揮**て之を出演せんとす。聊か劇に忠なるものならんか。貴覧の上御高評を賜らん事を奉願上候

臺南座主
正劇派蜻蛉會員　敬白

一番目　恨一刀（うらみのいっとう）　全七場
二番目　やり　五冊

第一　大阪道頓堀大豊店先の場
傘屋清吉　河本重徳
茨城治三郎　高野潤次郎
大豊熊吉　佐々木紫峯
いばらのお蝶　藤島操
仲居お竹　小松平春雄
車夫蝮仙太　中村敏太郎
娘お妻　縣健之助
服部憲兵曹長　小池三郎
第二　今宮土堤の場
服部曹長　小池三郎
車夫仙太　中村敏太郎
お蝶　藤島操
刑事伊東　小松平春雄
傘屋清太　河本重徳
お妻　縣健之助
大工藤五郎　岡本操
第三　藤五郎宅
茨城治三郎　高野潤次郎
田村三右衛門　中村敏太郎
お妻　縣健之助
令嬢絹　住吉豊美
大工藤五郎　岡本操
第四　大豊座敷の場
お妻　縣健之助
お竹　小松平春雄
大豊熊吉　佐々木紫峯
傘屋清吉　河本重徳
來客　大せい
第五　憲兵屯所場
傘屋清吉　河本重徳
服部曹長　小池三郎
第六　大豊離座敷の場
熊吉　佐々木紫峯
お竹　小松平春雄
傘屋清吉　河本重徳
お妻　縣健之助
来客　明手
第七　水車場
傘屋清吉　河本重徳
お妻　縣健之助
刑事　明手
大豊熊吉　佐々木紫峯
部服憲兵曹長　小池三郎
二番目やり
藤村政夫　中村敏太郎
紳士吉村　小池三郎
仝田中　住吉豊美

仲居初　高野潤次郎　車夫松藏　藤島操　高利貸大野由隆　岡本操
老母とら　小松平春雄　仝吉松　縣健之助　車夫文藏　高野潤次郎
藝妓小龜　藤村操　料理人喜助　佐々木紫峯　**第四**　車夫文藏部家の場
高利貸大野由隆　岡本操　高利貸大野由隆　岡本操　女房お竹　縣健之助
第二　同裏門の場　**第三**　藤村宅　車夫文藏　高野潤次郎
藤村政夫　中村敏太郎　藤村政夫　中村敏太郎　巡査小森　藤島操
藤村抱車夫文藏　高野潤次郎　夫人雪子　住吉豊美　警部佐伯　佐々木紫峯
大野抱車夫權次　河本重德　下女お國　小松平春雄　高利貸大野由隆　岡本操

d

◎木戸大人金貳拾錢　◎小人軍人金拾錢
◎壹等棧敷金壹圓　貳等八拾錢　上割御壹人拾五錢　小人拾錢
◎下足は何人に限らず場へ持込を御斷申候
◎注意午後六時までに御出の方には木戸半額に致升

e

（臺南田中活版所印行）

二、考察

以下、本番付から読み解けることを、興行形態を中心に考察していく。主な補足資料として『台湾日日新報』（漢珍電子商城『漢珍知識網：報紙篇（台灣日日新報+漢文日日新報）』より閲覧）を用いているが、引用に際してルビを省略し句読点を補い、新字体に改めている。

台南座について

台南座が、正確にいつ建設され、いつから興行が始まったのか明確ではないが、石婉舜、頼品蓉によるプロジェクト研究「台湾早期戯院普及研究（1895–1945）ⅠⅡ」では、活動時期はおよそ明治三十五年（一九〇三）から大正四年（一九一五）頃で、台南市でもっともはやく出現した劇場の一つとして紹介される。また、場所は台南市開仙宮街で、ここは「日本軍憲屯所、十五憲兵本部、歩兵営、旅団司令部などの軍事機構」とは徒歩圏内の近さであったため、軍人の娯楽提供の場ともなっていたと説明されている。(4) 本番付の料金に関する記載によると、軍人用の料金が明記されており、木戸銭大人二十銭のところ、軍人は小人と同じ半額の十銭と特待料金となっている。確かに軍人を主要な観客層として見込んでいたようである。

台南座の劇場としての規模に関しては、明治三十八年（一九〇五）九月五日付『台湾日日新報』に、以下のように描写されているのが参考になろう。

> 炎暑之候芝居でもなけれど娯楽の趣味なき台南に於ては……行て見ようかと……重もさうな返事をしながら、つひ二三人集りたる末、出掛けること、なるなり。劇場としては台南唯一の台南座なれども、暴風雨に再三屋根を剥られて茅葺屋根にて間に合す小屋なれども割合ひに冷しく畳も近来新しく取換へたれば大入りにて三四百人、不入のときは二百人に足らぬこと珍らしからず。併し之れが台南にては当然かも知れず。

この記事では、台南座は台南唯一の劇場として紹介されているが、実際には大井頭街に、席主が交代し場内を多少改造して「大黒座」から「蛭子座」と改称したばかりの寄席があった。(5) ただし、当時の認識として、寄席は劇場ではないと考えていたと思われ、唯一の劇場というのは誤りとは言えないだろう。大入り時は三〇〇～四〇〇人を収容したとあり、いわゆる小劇場の規模である。収容人数に関しては、明治四十一年（一九〇八）五月二十六日付『漢文台湾日日新報』では「可容五、六百人」とされているのと一致しないが、三〇〇～四〇〇人の方が、当時の実態ではないだろうか。再三、暴風被害にあったため屋根は茅葺の間に合わせだったというので、少なくとも明

治三十八年においては、それほど立派な劇場だったとは思われない。偶然にもこの時、記事の書き手が見に行った興行は、役者名から本番付に関連する、つまり蜻蛉会の公演であったと推定され、しかも番付と同年で月日は以前の公演なので本記事の後半（後に引用する）を加えることで、同会の台南座での興行スケジュールがより明確になる。この点については後述する。

台南座の座主（座本、劇場の持主）については、明治四十三年（一九一〇）五月二十二日付『漢文台湾日日新報』の「台南通信（十八日発）」に、「台南座主人近藤氏、将以二萬金経営此業。而本島諸実業家。亦将集資創弁。均向當道稟請、猶未蒙許准云」、つまり、台南座主人の近藤氏は、台南に軽鉄を敷くために二万金を投資していたが、計測後の許可が出なく計画は頓挫していたという旨の記事がある。ここから少なくとも明治四十三年時点の台南座の座主は、近藤氏なる人物であったことが知られる。ある程度潤沢な資金をもっていた人物であったことが想像されるが、それが劇場の経営状態を示しているかは判らない。また、本番付の明治三十八年も同じ座主であったか検討の余地がある。ただ、町の開発事業にも一役買っている点は、古い例ではあるが大阪道頓堀の芝居小屋が町繁栄のために誘致されたことを思い出させる。[6] 台南座が設立された経緯にも町の繁栄を企図したという理由があった可能性はあるだろう。もっとも、推測の域を出ないが、近藤氏は座主に過ぎずどのような俳優を呼び、どのような演目をするかについてはそれほど感知していなかったようにも思われる。少し前の記事ではあるが、明治三十六年（一九〇三）十二月五日付『台湾日日新報』に、「いよ〳〵一両日中に台南座の仕打がやつて来るから台北座の浪人連は半数以上台南へ行く事になるであらう。其中に多賀之丞は潔ぎよく此際断然内地へ帰つて其内機会を見合して再び花々しく乗込むと云つて居る。又源之助も台南へは行かぬ側らしいがまだ何うするか判らぬ」という記事があり、台南座の「仕打ち」が台北座に出演していた役者を、いわばスカウトしにやってくることが予告されている。座主自ら訪れたなら座主と書くだろう。仕打とは、江戸中期以降の慣習として、名目的興行者である座主に対して資金を出す芝居興行の出資者で、実質役者の雇入れにも関わる人物であるが、[7] 出資していたかはともかく、右の記事はまさしく実質役者の雇い入れに関わる役割を担う人物が台南座にいたことを示している。ちなみに、記事中に台南座からの誘いを断る構えであるとしている多賀之丞、源之助はいずれも明治三十六年頃から、台北座で活躍していた旧劇の役者である。[8] この一件は、明治三十六年（一九〇三）十二月二日付『台湾日日新報』「梨園雑俎」に報じられている、台北座座主の笠松が十二月十日からの初日に、初めて壮士俳優を呼ぶことを検討したことに端を発するらしい。そこでは、

さて弥壮士劇とすれば今迄の旧劇俳優は不用となる訳なので内々台南へ連れて行かうと云ふ話が無いでも無いが之は到底云ふべくして行はれない事だ▲女郎には鞍替と云ふ事はあるが、役者の鞍替と云ふ作法はないから台南に行きたくば勝手に行くが借金の枷に台南への鞍替はマアお断りだと云つて居る者もあるさうな▲すると又台南のある仕打から鶴三郎とかの許へ手紙が来て相当な座頭を連れて来いと云つて来たので内々謀反を企んで居る者があると云ふ事ぢゃが偖て何うなるかはコ、四五日の内である

とある。台北座からいわばお払い箱になる旧劇俳優が、次に向かうルートとしてまず台南が浮かんでいること、台南に行きたくないと断る俳優を想定していること[9]、台南座の仕打が積極的に役者に手紙を送っているらしいことなどは、あながち座主、もしくは記者の想像の話でもなく、当時の台南座の位置付けを示しているように思われる。明治三十六年（一九〇三）十二月四日付『台湾日日新報』によれば、台北座では、壮士俳優角藤定憲一座の興行を十日から始めることを公式に決定したらしく、従来の旧劇俳優連は「一昨日突然解雇の宣告」を受け、「俳優連の狼狽は一方ならず中には台南座より過日一寸相談ありしを頼みにして、其方へ鞍替なさんとする者なれば、或は未練ヶ間しく台南あたりに耻面曝らさんより如何なる工面をしても奇麗に内地に引揚げんといふ者あり」と報じられている。台南座での公演は都落ちのような印象があったようだが、それはさておき、台南座から積極的に台北の劇場に出演する俳優と交渉していたらしいことは留意される。本番付の（3）において、今回より新たに役者として加わったとする河本重徳の口上に「私儀是迄臺北榮座に於て興行罷在、當座主の招きにより再三再四来南なさんと致し候へ共」とあるのは、実際に台南座の仕打ちが台北の栄座に赴き、台南座での出演を直接交渉したことを示していると考えて良いだろう。

「蜻蛉会」の俳優について

十枚の本番付はいずれも正劇派「蜻蛉會」という団体の興行番付である。「正劇」とは、明治二十一年（一八八八）十二月、大阪で角籐定憲によって発足した「大日本壮士改良演劇会」をひとつの契機とする壮士芝居、書生演劇の流れをうけ、明治三十六年（一九〇三）二月、川上音二郎一座が、江見水蔭翻案『オセロ』を上演した際、はじめて「正劇」と冠したと言われる。川上の正劇運動は、明治三十九年（一九〇六）十月の『祖国』が最後とされるので[10]、本番付は正劇運動の末期と言えるだろう。ただし、どこまで川上の理念を共有し

ている団体なのかは不審なところもある。それは、以下でも見ていくように、会員の俳優は、様々な新演劇、壮士芝居の団体に所属していたらしいことから想像される。まず、番付から確認できる俳優を五十音順に掲出し、出演する番付の整理番号を列記する。すべての番付に名前が確認できる俳優には（全）と記している。

縣健之助（全）
伊勢一馬（1～4）
岡本操（全）
小池三郎（全）
河本重徳（3～10）
後藤晃（1～2）
小松平春雄（全）
佐々木紫峯（全）
住吉豊美（全）
高田義雄（1～9）
高野潤次郎（全）
中村敏太郎（全）
藤島操（全）

四人の役者の入れ替わりはあるが、のべ十三名、興行毎でいえば十～十二名の団体ということになる。番付をみれば一人二役三役もしばしばみられ、それは演出効果を狙ったものではなく単純に少人数の団体であることに由来すると思われる。先に言及したように、俳優のうち、本番付（3）によれば、河本重徳は台北の栄座に出演していた際に、台南座より何度も誘いをうけて、明治三十八年九月三十日より台南座により出演するようになったという。本番付の1～3に年表記はないが、（1）が九月二十日、（2）が九月二十四日、河本が加わった（3）が九月三十日開演と並べたところ、1，2に河本の名前がなく、この点では矛盾がない。河本の栄座出演については、明

治三十八年（一九〇五）三月三十一日付『台湾日日新報』「栄座の新來俳優」に、

…昨日入港の便船にて去る廿四日まで大坂朝日座に出勤し居たる西田敏夫、川本重徳及び生旦住吉豊美の三名到着したれば来月の初日には花々しき劇を出して一景気附けんとて、目下狂言選択中なるが差詰協議に登れるは何れも今春以来道頓堀の三座にて未曾有の大入を占めたる美禅房作の日本丸、朝日新聞の琵琶歌、妙な男、川上が出し物の王冠等なりといふ。

とある「川本重徳」のことと考えて良いだろう。これによれば明治三十八年三月二十四日まで大坂朝日座に出勤した後で台湾に向かい、三月三十日に台湾に到着したらしい。大阪朝日座では、喜多村緑郎、秋月桂太郎、小織桂一郎らが出演する『うき世責（高安月郊訳レミゼラブル）』『琵琶歌』[11]が、明治三十八年三月一日初日で上演されており、これに出演していたと考えてよいだろう。そうすると河本は、明治二十九年九月に川上音二郎一派から出た喜多村緑郎が結成し、明治三十三年六月以降朝日座で活躍したいわゆる第二次「成美団」に参加していたと考えられる。河本が台湾に渡った明治三十八年は「成美団」が安定して興行を行っていた時期であり、大阪朝日座につい先日まで出演していた俳優の渡台は、それなりの話題性があったと推察される。なお、河本重徳は、『演芸倶楽部』（巻二―七、大正二（一九一三）七月発行）の「俳優出世帳（六月披露の新名題と新幹部）に写真付で履歴が載るが、それによると、「明治九年二月生。二十八年四月武地玄龍の作者のやうな仕事をして終に俳優となる。初舞台は横浜。今は喜多村の門下。◎得意は髷物。」とある。[12]台湾に渡った時は俳優歴十年目、二十九歳と若い。

また、河本（川本）重徳と同様に、大坂朝日座の出演から台湾に渡り栄座に出演した「生旦住吉豊美」は本番付すべてに名がみえる女形である。二人は台湾到着の約一週間後の明治三十八年四月五日より栄座にて、「内地より乗込みたる西田敏夫、川村重徳、住吉豊美の御目見え狂言」として、一番目『因果の戀』二番目『妙な男』に出演する。[13]以降『台湾日日新報』に掲載される栄座の上演情報を辿る限り、同年六月九日開演の替藝題までに、河本姓と住吉姓の俳優の出演が確認できる。同じ出演者に「縣」「藤島」の名も散見され、本番付の縣健之助、藤島操である可能性があるだろう。縣、藤島姓の俳優は、栄座では少なくとも同年三月より六月三十日開演の『丸夫婦』（八場）まで出演していたことが確認される。[14]彼等が本番付の縣健之助、藤島操同一人物だとすれば、これも台南座の仕打ちによって出演交

渉がなされ、住吉、ついで縣、藤島と、栄座の公演から抜けて、台南座に移ったという事情が想像される。河本については、栄座の七月二十四日開演の替藝題一番目『カモクーラー』（シェリダン）、二番目旧劇『戀女房染分手網子別れの場』まで出演していたようで、本番付（3）の口上書に、台南座座主からの再三の誘いがあったものの「種々都合有之候為め、今日迄延引仕り候」とあるのは、栄座の方で河本に抜けられては困るという事情があったためだったのかもしれない。なお、前掲の『演芸倶楽部』に「得意は髷物」とするだけあって、栄座では旧劇系の演目でも配役についていたことが知られる。

さて、河本の台南座お目見えが宣言された番付（3）では、「岡本操等一派と共に」とあることから、本番付のすべてに出演している岡本操が、一座の中心人物のひとりだったように書かれている。もっとも岡本操については、台湾・日本国内ともに履歴を明らかにできていない。また、記事引用は後掲するが、明治三十八年（一九〇五）九月二十六日付『台湾日日新報』「台南の壮士俳優」は、本番付に関する興行終了後の記事とみなされ、そこに「同地唯一の台南座にては小池三郎を座長とし」という文言がある。岡本操一派は別の小グループを率いて台南座に参加していたが、蜻蛉会としては小池三郎が座長格であったとみる方がよさそうである。小池三郎については、前半を前掲した明治三十八年（一九〇五）九月五日付『台湾日日新報』「台南の興行物」の後半に、

俳優は台北の落人小池三郎、高野潤次郎、藤島操、小松平春雄、住吉豊美、高田義雄、伊勢一馬、中村敏太郎、後藤晃、縣健之助、佐々木紫峰（力雄改）等の一座昨日までの芸題は毒婦木鼠お仙（五幕）お仙の住吉、刑事上村の佐々木にて逮捕に苦心の場を演じたるが本日より芸題を変へて七化お新。例の高野が毒々しきお新を演つて小池、中村の立役、伊勢の敵役藤島の三尺物、住吉の娘、小松平の三枚目とは自身口上の洒落れなり。木戸二十銭、子供十銭桟敷一円に八十銭の一等上割は十五銭小児十銭午後六時前は木戸半額として客を寄せる也。

とあるのが参考になる。右は、台南での興行についての記事で、俳優の名前、本番付から想定される各俳優の立役、女形、三枚目など役柄と記事の『毒婦木鼠お仙』での役柄との合致、木戸銭の取り決めまで本番付と一致するので、正劇派「蜻蛉会」のことを報じていると断じて良いだろう。ここで上演された「毒婦木鼠」の芝居番付は現存が確認されていないが、本番付から知り得る「蜻蛉会」の上演以外

にも上演があったことがこの記事から知られる。俳優に関して言えば、ここで「台北の落人」とある小池三郎は、確かに『台湾日日新報』の台北座の上演情報の配役に「（小池）」とあるのが散見される。また、明治三十七年（一九〇四）十月十五日付『台湾日日新報』「彰義隊の風紀紊亂」に、やや不名誉な記事が載る。九月下旬より基隆の福楽座で興行中の「壮士俳優彰義隊」の一座が「台北に居りし頃より猥らなる挙動」があったが、基隆でも「尚此弊風」を改めず、むしろ一層甚だしくなっているというのである。そこに「日吉亭の酌婦富川しほ」が、情夫を捨てて「俳優の一人なる中村敏太郎に現を抜かし、更らに又同じく仲間の小池三郎に乗替へて是見よがしに浮かれ居る」として、小池三郎の名が確認できる。同じ仲間とする中村敏太郎も、本番付すべてに名前が見える人物である。二人は「彰義隊」の一員だったと考えてよいだろう。

「彰義隊」は、明治三十六年十二月十四日より台北座で「蓋明け」された新演劇の一座で、中村敏太郎は連隊長として記されている。(15) 中村は、先述した旧劇俳優解雇の一件の時に、台北座座主の笠松が呼び寄せた壮士俳優角藤定憲一座のひとりで、明治三十六年（一九〇三）十二月四日付『台湾日日新報』によれば、「是れまで岡山にて興行中なりし所、先月中にて打上げ、明四日馬関より西京丸に乗船する筈なれば来る七日当着」したとある。その一座の連名に、「佐々木紫峰（力雄改）」とあるが、前掲の明治三十八年（一九〇五）九月五日付『台湾日日新報』「台南の興行物」に「佐々木紫峰（力雄改）」とあるので、彼は本番付において全てに出演する佐々木紫峰のことである。彼も「彰義隊」の一員であったと判断される。

ところで、前掲の「彰義隊の風紀紊亂」の記事では、「彰義隊」の基隆における素行の悪さが報じられ、演劇終了後二手に分かれて「下等料理店」「飲食店」を狂ひ廻りてと、終演後酒を飲みにくり出しては、酔っぱらい大騒ぎをしていたらしい。このような俳優たちの素行の悪さについては、ほかにも明治三十七年（一九〇四）一月十四日付『台湾日日新報』「梨園雑俎」に、

一昨々夜台北座では佐々木力雄と中村敏太郎とが酒機嫌の大気焔から一寸活劇を演じたが、一時間余幕明きが遅れたのみで無事に演了したが、二人とも意趣があるでも何でも無く、ほんの酒の上の事とて醒めて見れば何でも無く全く佐々木が悪かつたのだと本人大いに閉口をして居るとサ▲何しろ天下の書生が学業を遣り損ねて俳優となつたのだから是れ位の元気が無くてはならぬドシ〳〵遣るべしだ、併し夫れが為め舞台に影響を及ぼして看客に不快を感ぜしめたりする事丈けは固く慎むが宜からう。（中略）▲事の序でぢゃ

から尚う少し憎まれ口を利いて置こう。名は気の毒だから指さぬが確かに二三人丈けは此頃大分風儀が崩れ出して来たやうで面白からぬ風説が時々耳へ這入る。座主も既に其筋から注意まで受て居るのだから充分の取締を為し座長も能く注意するが好からう。▲風儀の点から云へば栄座の若手連中も亦大分崩れ出して青年会組織当時の勇気は何処へやら行つて了って先づ舞台を粗末にし不勉強至極で女に関係をつける杯と来てはモウ駄目だ。緊乎褌を締めてかゝらぬと人気に関はるぞよ。

とある。「天下の書生が学業をやり損ねて俳優となった」という文言から当時の新演劇に対する評価が垣間見られるが、少なくとも本番付に名前が見える佐々木力雄と中村敏太郎が血気盛んな若者であったことは留意しておいてもいいだろう。

さて、前述した明治三十八年九月二十六日付『台湾日日新報』「台南の壮士俳優」には、「同地唯一の台南座にては小池三郎を座長とし住吉豊美、高野潤次郎、佐々木紫峰（力雄の事）、小松平春雄、縣健之助等の一座へ更に今回台北の落武者岡本操、高田義雄等加はりて」と紹介されている。栄座に出演していた住吉豊美、縣健之助について、小池三郎の一座として記しているのは、台南座での興行開始時点からすでに一座として参加していたためで、岡本操、高田義雄はすこし後に加入したという事情を考えていいのかもしれない。二人も「台北の落武者」と記されている。明治三十八年と推定される本番付（1）は九月二十日開演で、そこにすでに岡本も高田も出演している。この時がお目見えであれば、口上書にその旨が披露されるだろう。また、前掲の明治三十八年（一九〇五）九月五日付『台湾日日新報』「台南の興行物」には岡本の名こそ見えないが、高田の名はあげられている。少なくとも九月初頭には参加していたのではないだろうか。

ともあれ、「蜻蛉会」の俳優は、角藤定憲筋の「彰義隊」として明治三十六年十二月より台北座や基隆福楽座に出演していた俳優（小池三郎、中村敏太郎、佐々木紫峰、小松平春雄）、少なくとも明治三十八年三月頃から台北の栄座に出演していた俳優（縣健之助、藤島操）、明治三十八年（一九〇五）三月三十日に台湾入りし栄座に加入した、喜多村禄郎筋の俳優（河本重徳、住吉豊美）、出演歴が未詳ながら台北にて出演経験のある岡本操、高田義雄など、それぞれ異なるのルーツを持つ俳優たちの混成チームであったと言えるだろう。そのほかの伊勢一馬、後藤晃、高野潤次郎、後藤晃に関して、台南座以前の活動履歴を特定し得てないが、上述のいずれか、あるいはほかの一派の俳優だろう。なお、このうち、後藤晃、伊勢一馬、高田義雄は、途中で出演が途切れる。次に詳述するように、蜻蛉会としての興行は本番付の上演がすべてではなかったと見込まれるので、番付（10）のみに名前が見えない高田義雄はたまたま休演していただけの可能

性も捨てきれないが、番付（2）にしか出演していない後藤晃、番付1～4で以降まったく出演がない伊勢一馬などは、他の劇場に引き抜かれたか、内地に引き揚げた可能性があろう。

『台湾日日新報』を調べた管見の限りではあるが「蜻蛉会」の名、同じメンバーで、他の劇場で興行していた実績は見いだせない。おそらく台南座に流行の新演劇を呼びたいという仕打ちの意思によって、台北ですでに活躍していた俳優や、大阪の俳優を呼び寄せ、台南座での興行のために臨時に結成した会が「蜻蛉会」であったのではないだろうか。ただし、これは特別珍しいことだったわけではなさそうで、明治三十三年九月二十八日付『台湾日日新報』「台北座の壮士演劇」では、「台北座にては此たび新たに組織したる大成団一座の壮士演劇を今廿八日より開演するよしなるが東京より態々呼寄せたる俳優もありて座中一同車輪となり働くとのことなり」とある。これは台北座が主体となって、種々の役者を呼び集め「大成団」という名で興行をさせていた例であり、台南座の「蜻蛉会」も同じように台南座に新演劇を興行させるために、特別に組織した一座なのではないだろうか。

上演演目と興行日数について

本番付は、台南座において、明治三十八年（一九〇五）九月二十日開演演目から同年十一月十七日開演演目までのうち、十公演を示す上演資料だが、この期間のすべての公演を示しているのだろうか。

まず本番付中九月二十日初演『美人の生埋』（1）の口上書に「扨當蜻蛉會儀御當地に於て興行を重ねたる事茲に九十日余」とある。このことから、蜻蛉会の台南座でのお目見えは、少なくとも八月初め頃だったと推察される。本番付（7）の口上書に「先月来好劇家諸君より今次の天長節には兼て御目見榮の際に演出したる「武士道」を再演せよと」とあるところから、お目見え狂言は『武士道』であったとも推察される。また、前述したとおり、蜻蛉会について報じていると判断される明治三十八年（一九〇五）九月五日付『台湾日日新報』に、「昨日までの芸題は毒婦木鼠お仙（五幕）」「本日より芸題を変へて七化お新」とある。このことから、明治三十八年九月四日までは、『毒婦木鼠お仙（五幕）』が、九月五日より『七化お新』に芸題が変わったことが知られる。加えて、本番付（3）の口上書に、台北の栄座の『琵琶譜』について「連日大入の為め三日目毎の教言なるにも不拘五日間興行致し候」とある。通常は三日毎に演目を入れ替えていたのが通常だったようである。本番付（5）『己が罪』で、前編を十月二十一日から、後編を三日後の十月二十四日から上演して

いるのも、三日毎に演目を替える通例に倣ったと判断される。以上を踏まえ、蜻蛉会の興行日程を一覧してみると、以下のようになる。なお、日付が連続しないところに「＊　＊　＊」を示し、推定による情報を〔　〕に入れている。冠している数字は本番付の翻刻で示した整理番号である。

〔明治三十八年八月上旬、台南座お目見え教言『武士道』〕
明治三十八年〔九月一日〕～九月四日『毒婦木鼠お仙』（五幕）
明治三十八年九月五日～〔九月七日〕『七化お新』

＊　＊　＊

1〔明治三十八年九月二十日～〔二十三日〕『〔松の操〕美人の生埋』（全十二場）
2〔明治三十八年〕九月二十四日～〔二十六日〕『大名と旗本』（全九場）

＊　＊　＊

3明治三十八年九月三十日～〔十月二日〕『琵琶歌』（全七冊）

＊　＊　＊

4〔明治三十八年〕十月五日～〔十七日〕『福徳利』（全三幕）、『とんぼと鷺』

＊　＊　＊

5明治三十八年十月二十一日～〔二十三日〕九『己が罪』前
5明治三十八年十月二十四日～〔二十六日〕九『己が罪』後
6〔明治三十八年〕十月二七日～二十九日『怨之杖』（全六幕）
7明治三十八年十一月二日～〔四日〕『武士道』（八）
8〔明治三十八年〕十一月五日～〔七日〕『人身の詐儀』（全七幕）
9〔明治三十八年〕十一月八日～十日『天に口なし』（全六幕）

＊　＊　＊

10〔明治三十八年〕十一月十七日～〔十九日〕『恨一刀』（全七場）『やり』（五冊）

このように並べてみると、本番付は、おおよそまとまった興行の芝居番付であることが見えてくる。「＊　＊　＊」で示した時期の興行の有無は不確かで他資料で補足もできなかったが、興行があったとすれば、2～3、4～5の間はそれぞれ一替芸題ずつ、3～4の間に四替芸題、9～10の間に二替芸題あったということになろう。十一月二十日以降、蜻蛉会の公演がいつまで続いたのか定かではないが、十二月に次の興行と契約する旧例にならい、十一月中で興行は終了したのかもしれない。後述するように、翌三十九年（一九〇六）三月六日の時点で、台南座は旧劇が上演されていたようであるから、[16] すくなくとも「蜻蛉会」の興行はそれまでに終了しているはずである。

演目の詳細や選んだ理由については口上書に詳しいので詳述しないが、番付（2）の『大名と旗本』と「大阪朝日座に於て興行なし、大喝采を博したる好狂言にして」、番付（4）の『福徳利』「京坂地方に於て大好評を博したる者にして」、番付（9）『天に口なし』に「前年大坂朝日座神戸大黒座等にて出演の際は非常の歓迎を受け大喝采の下に三十有餘日間も打續けたる」と京阪神での上演で好評を得た作品が選ばれる傾向が見える。これは、壮士芝居の発祥地が大阪であることと関連するというよりも、台湾の興行物全体の傾向を反映していると思われる。明治三十一年（一八九八）十月二十一日付『台湾日日新報』「台北の諸興行物（つゞき）」に、「台北在住の内地人なるものは全国より種々の人物の落ち合ひ来れるをも覚らで只上方風か若くは九州流を以て客を取扱へる傾あるは、実に舞台に上るものゝ尤も注意すべきものなるべし」とあるように、台北では当初は九州、それから大阪所縁の演者が興行に来る傾向があったらしい。台南座では先述のように台北で活躍した役者を招く傾向にあったため、同じ傾向にあっただろう。ただし、劇団新派編『新派年表』を調べた限り、口上書通りの劇場、演目の組み合わせでの上演は確認できなかった。[17]

一座の顛末

さて、蜻蛉会のメンバーには過去に素行の悪さが報じられた役者がいたことを先述したが、台南でも同様の報道がなされている。明治三十八年（一九〇五）九月二十六日付『台湾日日新報』「台南の壮士俳優」には、台北の栄座・台北座の新俳優が風紀を乱したことに触

れつつ、台南に行った壮士役者の行いについて以下のように告発している。ちょうど、本番付（2）『大名と旗本』上演中である。一部すでに前掲部分を含み、引用が長大になるが、興行の客入りや収入についても推測しているなど、詳細なので全文をあげる（傍線は私に付した）。

俳優が社会の風紀を紊し害毒を流す事、到底下水溝の比にあらず。されば警察にては衛生予防励行と共に風紀を取締れど、此奴眼に見えぬ代名物なれば頗る困難なりとの事にて、先般当地にて栄座台北両座の新俳優等が盛に風紀を掻乱したる如く、目下台南へ吹寄せたる壮士役者の行ひを聞くに、同地唯一の台南座にては小池三郎を座長とし住吉豊美、高野潤次郎、佐々木紫峰（力雄の事）小松原（ママ）春雄、縣健之助等の一座へ、更に今回、台北の落武者岡本操、高田義雄等加はりて薪に油を濺ぎ居り。台南座の観客は先平均して百名より百二十名内外のものなれば、この木戸二十銭割十五銭にて桟敷もあれど追込もあれば、平均是も一人三十銭の収入と見て大差なし。されば一夜の揚り高約三十円位にて、其三歩を俳優の所得、二歩は雇人、及雑費に充て、残余の五歩即ち毎夜十五円余は座主の劇場賃貸所得といふ割なるが故に、俳優は十人余りにて得る処僅かに二百七八十円に過ぎず。斯の如く薄給にて争で真面目に稼ぐ事を得べき。芸者を誑し仲居を絞り、果は良家の妻女をして操を破らしむるに至る仕誼なりといへり。芝居閉場て俳優の宿舎に入るもの恰も待合茶屋の如く。或は連れ出して他の料亭へ行くあれば、怪しげなる仲宿に逢引するあり。千差万態あるが、中に丸髷に結へる妻君が其半を占め居れりとは、取締上の問題たらざるべからず。併し乍ら台南町方の妻君等も亦た果して妻君の仕格ありやは考へものなり。広くもあらぬ台南の市民街を見渡して何町の誰れ、何町の何屋の妻君と数へ来れば誰れは芸者とか、又は仲居とか、而かも是等が妻君然として何々婦人会員、何々会員とか云へり。身元を洗って知る社会の半面は俳優を警戒するより、寧ろ妻君を警戒したい位なれど俳優たるものも亦た中々横着なる挙動あり。前原の如きは之れが為め台南を放逐されたるなり。今日にては座長の小池は割合に謹慎の模様にて他をも戒め居れりとか云ふ。

俳優連と妻君たちの話は、ゴシップ記事に等しく、話半分に読む必要があるかもしれないが、壮士芝居の若い俳優に対して警戒心があったのだろう。また興味深いのは、興行の懐具合を推察している傍線部のところで、「この木戸二十銭割十五銭にて桟敷もあれど」は、本

番付で示される料金「木戸大人金貳拾錢」「壱等桟敷金壱圓　貳等八拾錢」「上割御壹人拾五錢」などとするのと合致する。記事で観客動員数百～百二十名内外とするのも、ほぼ実態に則しているのではないだろうか。『台湾日日新報』では大入りの場合は大入りと報じられることが散見されるが、この時期でそのような記事に見いだせなかった。また本番付によれば開演時間五時半のところ、六時まで入場の場合は半額となるというサービスを展開している。観客が押し寄せるほどの人気公演だったとは思われない。一夜の揚がり高や、俳優の所得、雇い人への給金、雑費、座主の劇場賃貸所得など、当時の興行経営の実態を知る記述と思われる。

翌、明治三十九年（一九〇六）三月六日付『台湾日日新報』「台南と劇場」によると、おそらくこのころには蜻蛉会の興行は終了しているが、ようやく萱葺の屋根を修理して屋根瓦となった。

台湾に劇場台南座と云へるあり。昨年暴風雨に際し、二回余も屋根を剥られ茅葺にて補修し一時を間に合せたる迄の筈なりしが、遂ひに今日に至り漸く□（けい）日屋根瓦を葺けり。而して俳優には曩きに岡本操或は小池三郎、中村敏太郎の一派新演劇を打ち居りしが一座の中、佐々木力雄、高野潤次郎等両三輩の風紀に関わる素行あるより其筋の厳命下りて営業鑑札を引揚げられ同一座は遂ひに半ば離散して残る連中のみ打狗（たかを）に鳳山に或は阿緱等の田舎を巡業し其の跡へ旧俳優の雷花、竹三郎等来りて興行せり。昨今は台北の演劇株式会社より講談師燕林一座と朝鮮人の侏儒を伴ひ来りて数日間打ち続け居るが相当の賑ひにて燕林は斯道に名あるもの従来台南に来りたる芸人中には類なき好評あり。日々大入を占るも無理ならず。（以下略）

右の記事によると、佐々木力雄、高野潤次郎は素行の悪さで営業鑑札を取り上げられたとある。俳優業の営業停止処分である。「遂ひに半ば離散して残る連中のみ打狗に鳳山に或は阿緱等の田舎を巡業し、其の跡へ旧俳優の雷花、竹三郎等来りて興行せり」というのが蜻蛉会としての顛末と考えて良いだろう。高雄、鳳山、阿緱の巡業の実際は辿ることができなかったが、すでに台南座では旧劇の興行となっており、その後新演劇が興行した形跡はない。なお、高野潤次郎は、明治四十三年（一九〇一）二月二十二日付『台湾日日新報』に、高松豊次郎が本島人開発のための新俳優養成所「新派臺灣正劇」を作った際に振り付けを担当した人物として同姓同名の名が報じられている。同一人物だとすると、その後、営業鑑札を再取得したのだろうか。いずれにせよ、ひきつづき台湾で演劇活動を行っていたことが知

られる。

おわりに

以上、明治三十八年下半期の台南座での興行の芝居番付と推定される台南座蜻蛉会芝居番付十枚を紹介し、『台湾日日新報』を主な補足資料として、台南座における新演劇「蜻蛉会」の興行の実態を、推測を交えて考察してきた。『台湾日日新報』の記事が主な情報源となり、充分な検討が行き届いていないままではあるが、台南座における仕打ちの存在、台北市内の劇場からの引き抜き、内地からの俳優呼び寄せなど、当時の台湾での興行の実態をある程度、具体的に出来たのではないかと思う。新演劇、正劇派「蜻蛉会」の俳優連は、まさに蜻蛉のごとく、ひととき台南で結成され、それほどの成功を収めないまま、離散しながら地方に巡業に繰り出し、恐らくは自然消滅したであろう。その後歴史に名を遺すほどの活躍をした役者とは思われないが、こうしたマイナーな俳優の姿こそ、日本統治下台湾の演劇事情、当時の新演劇の実情を表わしているのかもしれない。

【付記】本論文は、二〇一八～二〇二二年度基盤研究（C）「日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築――現地資料に基づく基礎研究と考察――」（18K00234）の成果です。

注

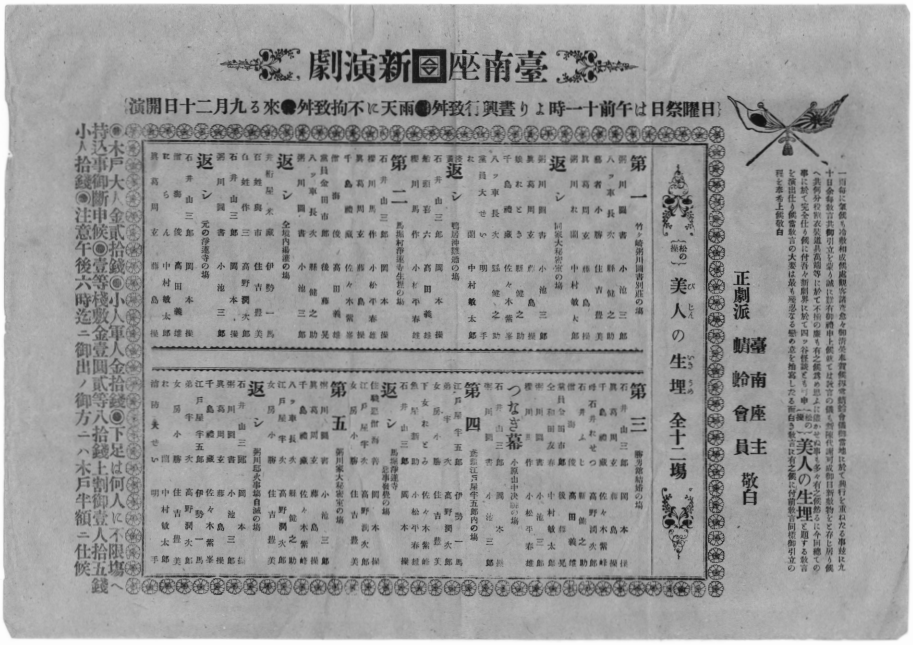
（1）石婉舜、賴品蓉によるプロジェクト研究「台湾早期戯院普及研究（1895-1945）ⅠⅡ」の成果による。台湾老戯院文史地図 1895-1945」（http://map.net.tw/theater/）。

（2）大阪大学大学院人文学研究科演劇学研究室保管。

（3）陳怡如「台湾における興行取締規則の制定と実施――皇民化運動期以前の大衆演劇活動からの考察――」（『文化政策研究』第一二号、二〇一八年）。

（4）注1と同じ。原文は繁体中国語。訳は筆者による。

（5）『台湾日日新報』明治三十八年（一九〇五）九月五日。
（6）『大阪市史』第一、第四輯「徳川時代」「芝居と遊郭」三五六頁。
（7）『新版 歌舞伎事典』「仕打（内）」の項参照。
（8）日置貴之「明治三十六年「台北役者評判記」（一）（二）」（『明治大学教養論集』五五七、五六〇、二〇二一年九月、十二月）
（9）明治三十六年（一九〇三）十二月四日付『台湾日日新報』。
（10）『演劇百科大辞典』（平凡社）「正劇」参照。
（11）劇団新派編『新派年表』（大手町出版、一九七八年、三九頁）
（12）同号に、新富座六月狂言『大将の家』の舞台写真に扮装した河本重徳が載る。
（13）明治三十八年（一九〇五）九月五日付『台湾日日新報』「栄座の替り初日」。
（14）明治三十八年（一九〇五）六月三〇日付『台湾日日新報』「栄座」。
（15）明治三十六年（一九〇三）十二月十五日付『台湾日日新報』「台北座新演劇の蓋明」。
（16）明治三十九年（一九〇六）九月三十日『台湾日日新報』「台南と劇場」。
（17）劇団新派編『新派年表』（大手町出版、一九七八年）。

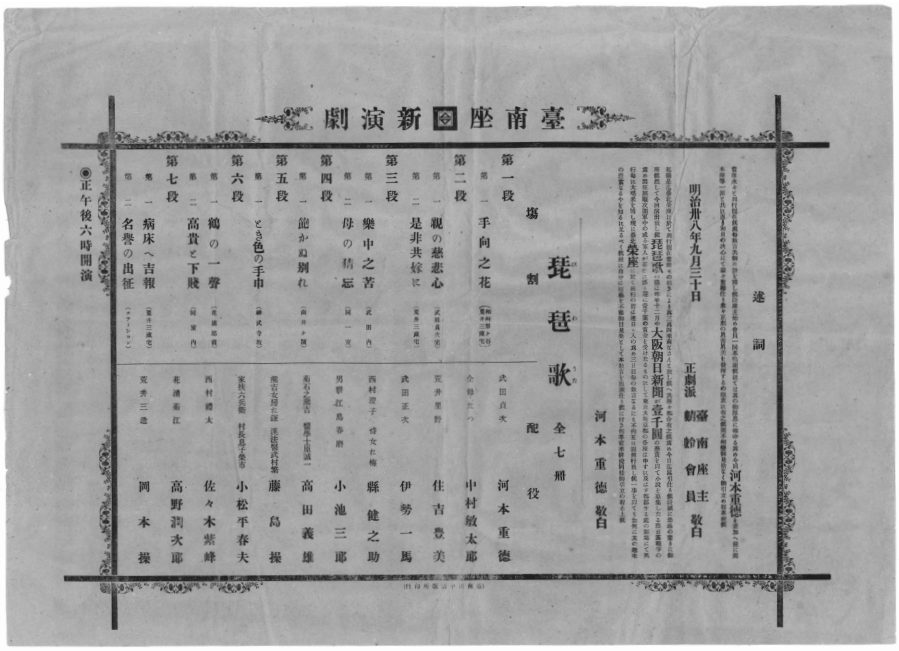


臺南座 今 新演劇

日曜祭日は午前十一時より興行致外●雨天に不拘外致●來る九月二十日開演

正劇派 蜻蛉會 臺南座主 敬白

一国の盛衰人身の興亡は偏に人心の如何に在り人心の如何は教育の如何に在り教育の如何は実に国家の大事なり然るに今日の教育は如何に見て如何に考へて如何に行ふべきか教育の目的は如何なる人物を養成するか教育の方法は如何なる事に於て完全なるか



臺南座　新演劇

述詞

明治卅八年九月三十日　正劇派　臺南座主　蜻蛉會員　敬白

河本重德

琵琶歌　全七冊

第一段　塲割

第一　手向之花　大阪朝日新聞ヲ壹千圓ニ賣ル

第二段

第一　親の慈悲心

第二　是非共嫁に

第三段

第一　樂中之苦

第二　母の情忘

第四段

第一　能か辺別れ

第五段

第一　とき色の手巾

第六段

第一　鶴の一聲

第二　高貴と下賤

第七段

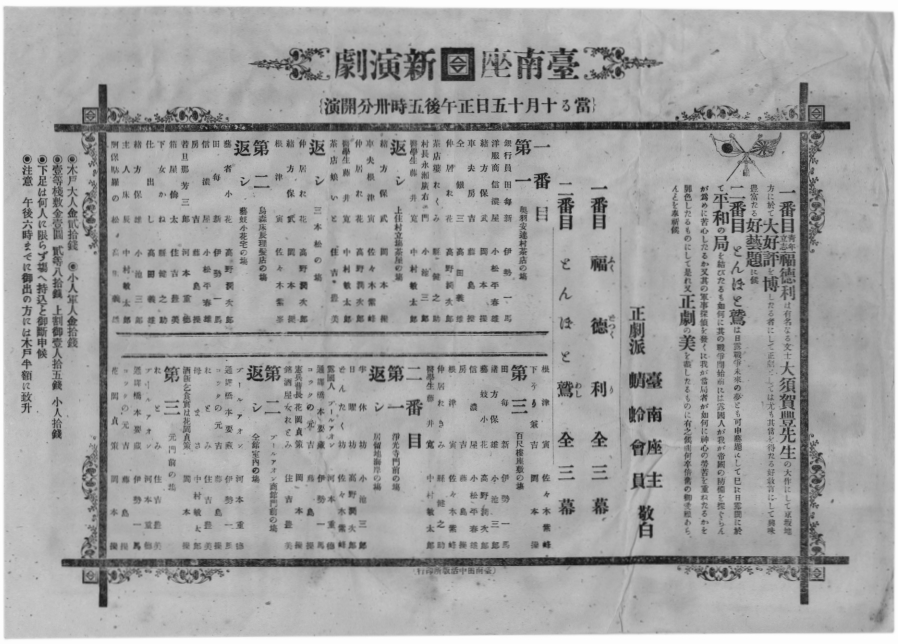
第一　病床へ吉報

第二　名譽の出征

配役

河本重德　中村敏太郎　住吉豐美　伊勢一馬　小池三郎　高田義雄　藤島操　小松平春夫　佐々木紫峰　高野潤次郎　岡本操

◉正午後六時開演



臺南座　新演劇

〔當る十月十五日正午後五時冊分開演〕

一番目　福德利　全三幕

二番目　とんぼと鷲　全三幕

正劇派　臺南座主　蜻蛉會員　敬白

一番目　福德利は有名なる文士大須賀鬼先生の大作にして近頃地方に於て大好評博し居る者にして正劇に於ては之を共に好藝題として興味深なる好藝題に

一番目　とんぼと鷲は昨年の夏の暑さも可申熱帯に於て平和の局を結び在たるも如何に其の戰爭間始終に於ては国人が我が帝國の榮誉を重ねたるかを

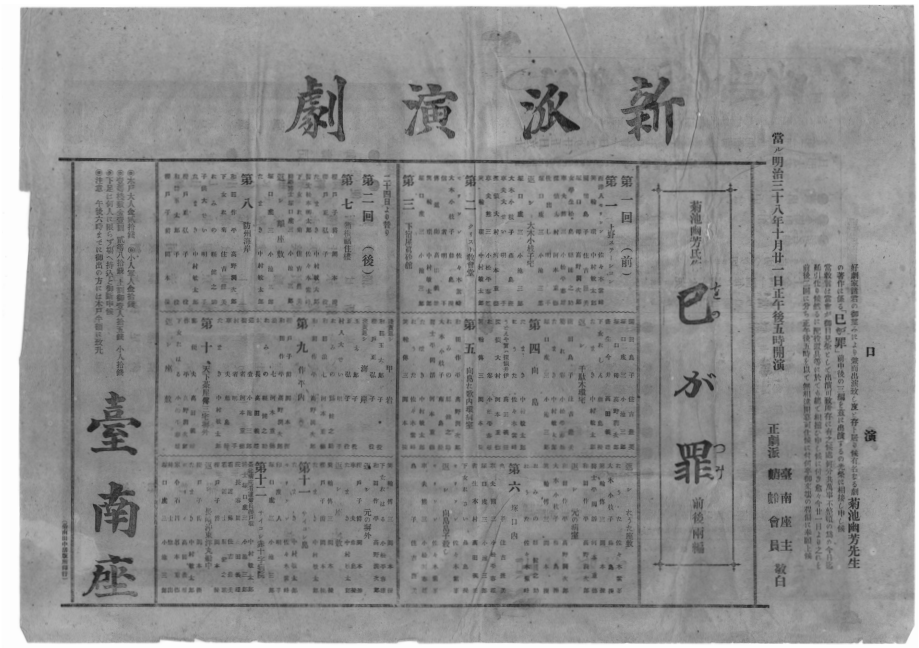
◉小人軍人金拾錢

◉大戸大人金拾錢

◉壹等桟敷金壹圓　貳等八拾錢　上等御壹人拾五錢　小人拾錢

◉下足は何人に限らず帽へ持込と御断申候

◉注意　午後六時までに御出の方には木戸半額に致升



新派演劇

當ル明治三十八年十月廿一日正午後五時開演

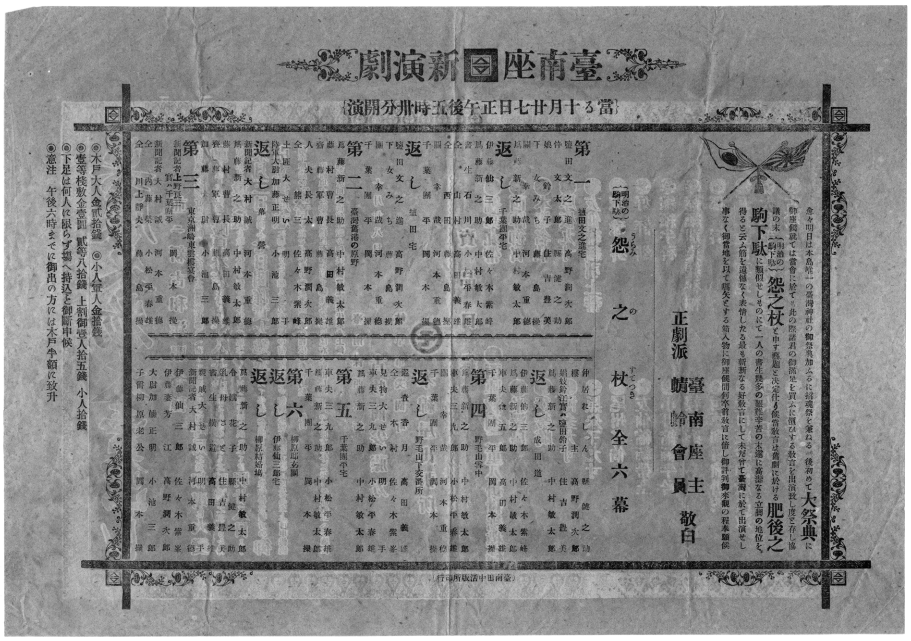
菊池幽芳氏作

己が罪 前後兩編

正劇派 臺南座主 蜻蛉會員 敬白

臺南座

図5 明治三十八年十月二十一日開演、正劇派「蜻蛉会」による『己が罪』番付



臺南座 新演劇

當る十月廿七日正午後五時開幕

駒下駄 怨之杖 全六幕

正劇派 臺南座主 蜻蛉會員 敬白

図6 十月二十七日開演、正劇派「蜻蛉会」による『怨之杖』番付

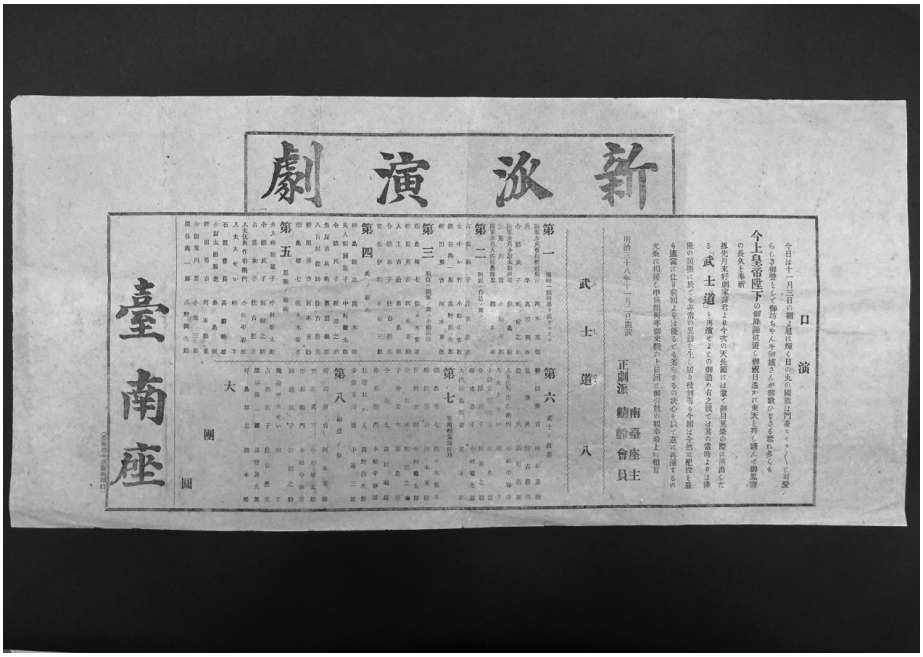

新派演劇
臺南座
武士道
正劇派　蜻蛉會員

図7　明治三十八年十一月二日開演、正劇派「蜻蛉会」による『武士道』番付

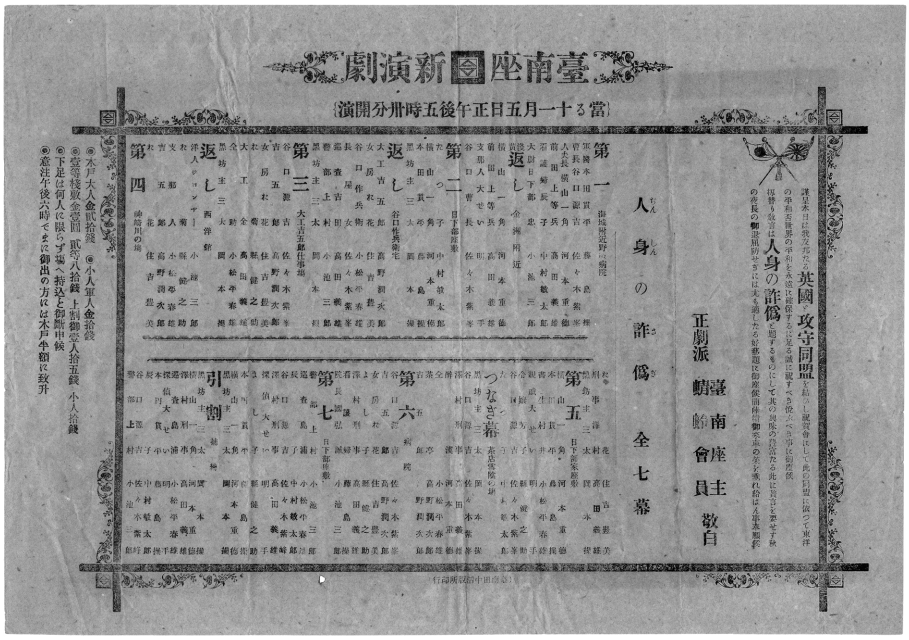
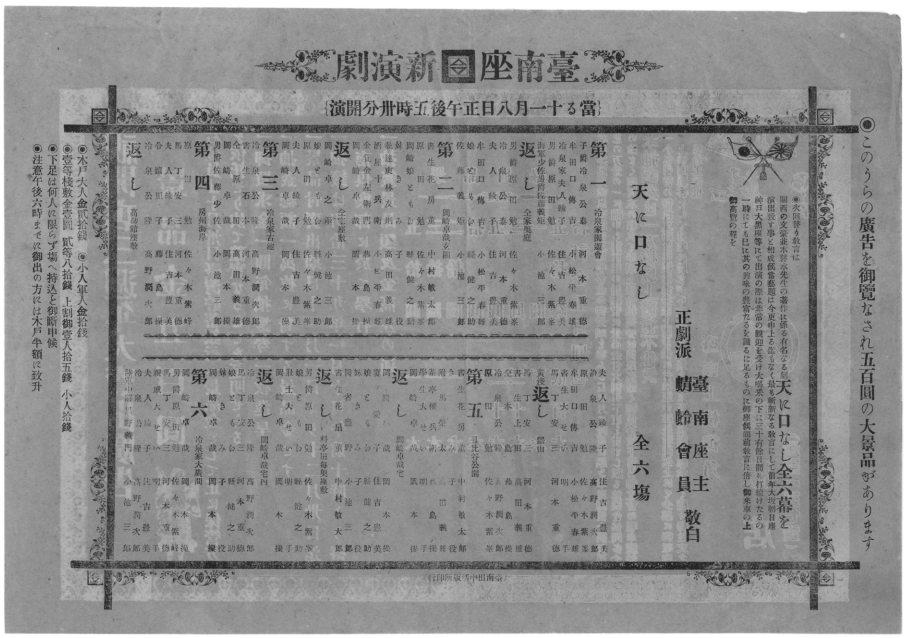

臺南座　新演劇
人身の詐偽全七幕
正劇派　蜻蛉會員

図8　十一月五日開演、正劇派「蜻蛉会」による『人身の詐偽』番付



臺南座 新演劇

當十一月八日正午五後時開分演

天に口なし

正劇派 蜻蛉會員 臺南座主 敬白

全六場

第一 冷泉家出張會

第二

第三

第四

第五

第六

返し

◉このうらの廣告を御覽なされ五百圓の大景品があります

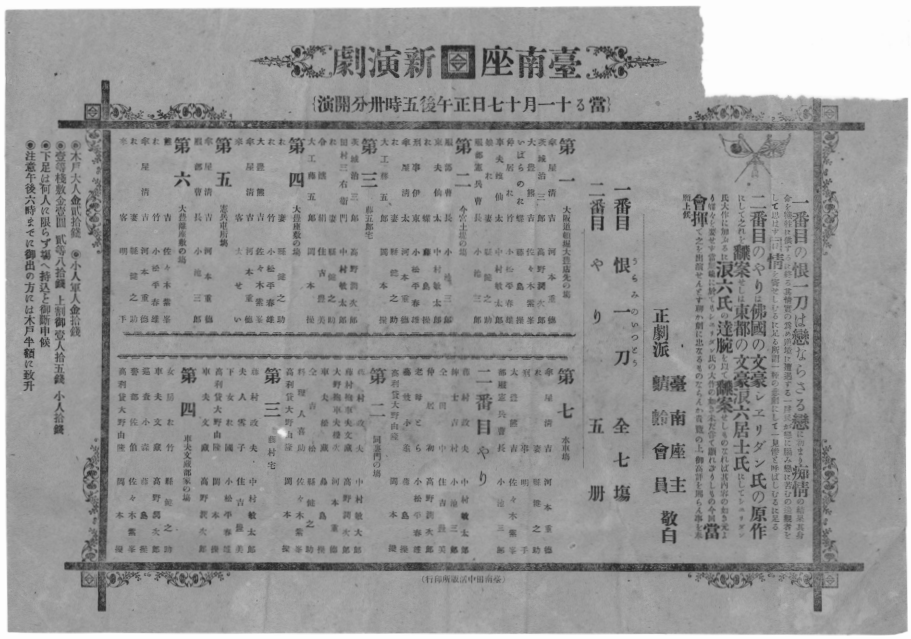
◉木戸大人金拾錢 ◉小人軍人金拾錢

◉壹等桟敷金壹圓 貳等六拾錢 上製御帯大拾五錢 小人拾錢

◉下足は何人に限らず場へ持込と御斷申候

◉注意午後六時までに御出の方には木戸半額に致升

図9 十一月八日開演、正劇派「蜻蛉会」による『天に口なし』芝居番付



臺南座 新演劇

當十一月十七日正午五後時開分演

一番目 恨一刀 全七場

二番目 やり 五冊

正劇派 蜻蛉會員 臺南座主 敬白

一番目の恨一刀は戀ならざる戀なれども婦人の情は男子に勝るとも劣らざるを例に取るも之を物語る一番目やりは佛國の文豪ルエリダン氏の原作にして之れを東都の文豪沢六居士氏が巧みに和文に直して出でたるものなり

一番目のやり佛國の文豪ルエリダン氏の原作にして之れを東都の文豪沢六居士氏にて和文に直したるものなり

第一

第二

第三

第四

第五

第六

第七

◉木戸大人金拾錢 ◉小人軍人金拾錢

◉壹等桟敷金壹圓 貳等六拾錢 上製御帯大拾五錢 小人拾錢

◉下足は何人に限らず場へ持込と御斷申候

◉注意午後六時までに御出の方には木戸半額に致升

図10 十一月十七日開演、正劇派「蜻蛉会」による『恨一刀』『やり』番付

Aspects of Shin-Engeki Producting in Taiwan During Japanese Rule
From ten playbills of Kagero-kai at South Taiwan theater, 1905

Kaoru NAKAO

Taiwan was a Japanese colony for 50 years from 1895 to 1945. During this period, various cultural activities were carried out by Japanese settler, including theatre performances such as Niwaka（俄）, Naniwa-bushi（浪花節）, Mizu-gei（水芸）, Rakugo（落語）, Joruri/Gidayu-bushi（浄瑠璃、義太夫節）, Kabuki（歌舞伎）, Authentic Drama/Sin-engeki/Sei-geki/Shin-pa（新演劇、正劇、新派）and etc. Especially, Shin-engeki has been fully researched by both Taiwanese and Japanese, as it's related to the rise of the new theatre movement by the Taiwanese intelligentsia. However little of known about how Shin-engeki had been run before the production by Otojiro Kawakami（川上音二郎）, who performed at Taiwan in 1911.

The purpose of this paper is to explain the actual state affairs of Shin-Engeki production from ten playbills of Kagero-kai（蜻蛉会）at South Taiwan theater（台南座）, 1905.